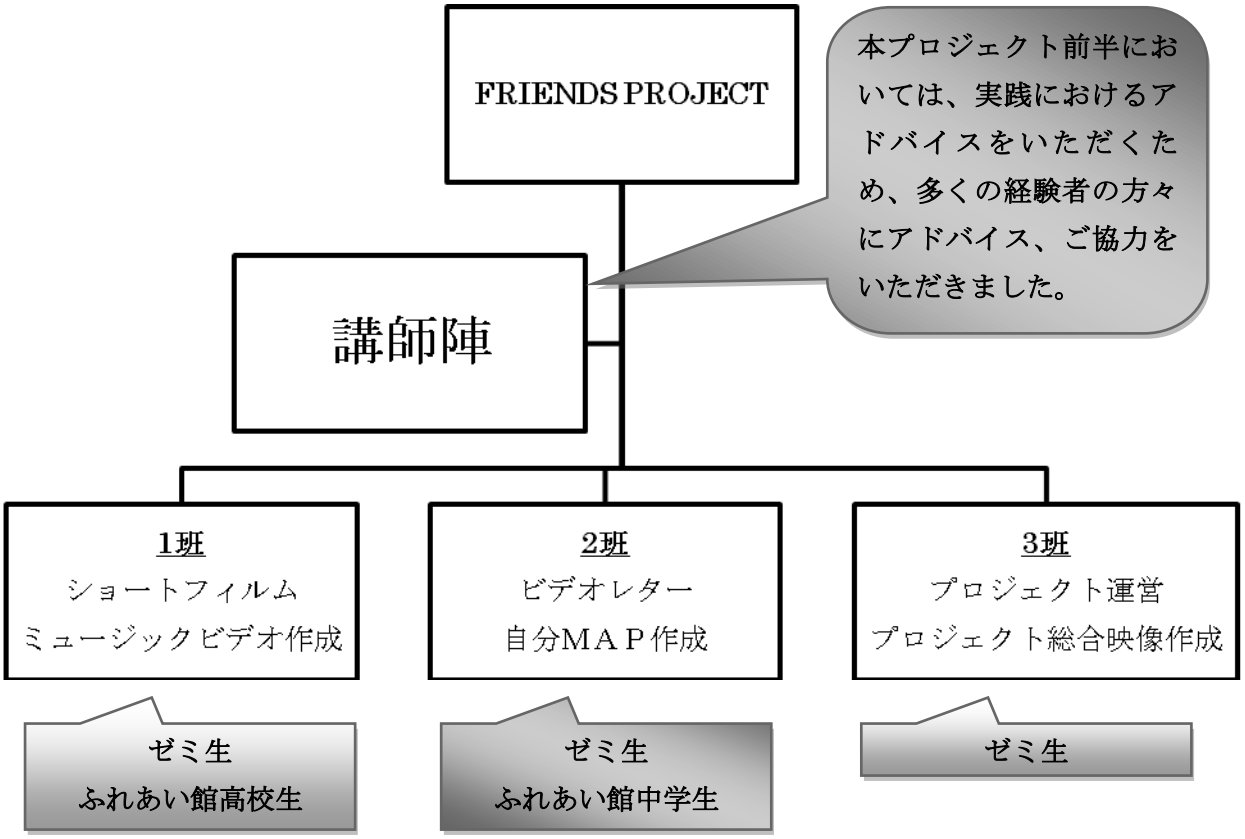
FRIENDS PROJECT 2009

＜目次＞

Ⅰ FRIENDS PROJECT とは …1 頁
－プロジェクトメンバー一覧 …2 頁
－塩原良和研究会とは …3 頁
－川崎市ふれあい館とは …3 頁
－塩原良和研究会と川崎市ふれあい館の出会い…4 頁
Ⅱ タイムスケジュール …5 頁
Ⅲ プロジェクトメンバー報告文 …10 頁
【コラム】
－＜学習サポートと FRIENDS PROJECT＞ …11 頁
－＜あのダンスは何ダンス？＞ …16 頁
－＜普段のゼミ活動＞ …21 頁
－＜三客班という名前について＞ …26 頁
－＜子どもたちとデジタル＞ …28 頁
－＜三田祭発表映像＞ …31 頁
－＜普段の三客班ＭＴＧの様子＞ …35 頁
Ⅳ 指導教員よりひとこと …36 頁
Ⅴ 子どもたちからの感想 …38 頁
Ⅵ 上映会報告
－2009 年 12 月 17 日 ＠ふれあい館 …39 頁
－2010 年 1 月 15 日 ＠日吉授業 …42 頁
－2010 年 1 月 18 日 ＠三田の家 …43 頁
－2010 年 2 月 3 日 ＠日吉来往舎 …46 頁
－これからの FRIENDS PROJECT …53 頁
Ⅶ 編集後記 …54 頁

Ⅰ．ＦＲＩＥＮＤＳ　ＰＲＯＪＥＣＴとは

2009 年に始まった、塩原良和研究会の大学生と川崎市ふれあい館における外国につながる子どもたちの協働プロジェクトです。ゼミ活動をきっかけに、学習サポートという形で川崎市ふれあい館の外国につながる子どもたちと出会ったゼミ生は、普段は日本社会で息苦しい思いを経験することが多いにも関わらず、いざ自分の興味分野となるといきいきと活動する彼らに魅力を感じ、何かを一緒に始めたくなりました。　それが、映像作品の作成を通じて協働を実践し、互いに自己表現と自己肯定の機会を得ることを目標とした本プロジェクトです。



理念

「関与」：自分とは異なる他者とひとりの人間として関わりあい
「対話」：誠実な話し合いのなかから
「対等」：目の前の相手となるべく対等な関係を築き
「変革」：そこから社会全体を変えていく
「希望」：その可能性について希望を持ち続ける

■プロジェクトメンバー一覧

塩原良和研究会

指導教員―塩原良和

FRIENDS PROJECT
SHIOBARA SEMINAR

1班（50音順）
- 高橋研一郎（3班兼班）
- 徳島えりか
- 貫井あゆみ
- 橋詰美緒
- 平山絵理奈
- 細田瑞穂
- 宮本翔太

2班（50音順）
- 青島沙紀
- 石橋春華
- 大谷洸仁
- 佐藤麻里絵
- 畑宗太郎
- 服部菜央

3班（50音順）
- 井上若菜
- 大川史織
- 菊池美峰
- 木村友紀
- 高橋研一郎（1班兼班）
- 中西良介
- 蜂屋絵美里
- 福元理央
- 吉村麻友子

川崎市ふれあい館

1班
高校生　5人

2班
中学生　4人

スタッフ代表
原千代子さん

■塩原良和研究会とは

塩原良和研究会（以下塩原ゼミ）とは、2008 年度秋学期に開講した慶應義塾大学法学部政治学科、国際社会学を主な研究対象としている研究会です。2009 年度現在、海外に留学中のゼミ生も含めて 4 年生 8 人、3 年生 14 人で活動しており、それぞれ十人十色の興味分野を研究していますが、そんな中、22 人共通のトピックとして勉強をしているのが、「日本における多文化共生のあり方」についてです。塩原ゼミでは、文献講読のほかに、外国にルーツを持つ方々やその支援に携わる方々にインタビューを行ったり、協働実践を企画したりとフィールドワークを行い、肌で人と社会を感じる時間を大切にしています。

■川崎市ふれあい館とは

ふれあい館とは、1988 年川崎市桜本地区に設立された川崎市の公共施設です。川崎市の桜本地区は、JR の川崎駅からバスで 15 分ほど行ったところにある京浜工業地帯に隣接した地域です。かつては工場のばい煙が蔓延し、密集住宅が立ち並ぶなど劣悪な条件の下で生活保護の家庭が多く暮らしており、在日韓国・朝鮮人の多住地域でもありました。彼らの多くは、日本の植民地政策の中でやむなく日本に働きに来た人たち、あるいは戦時中に強制連行された人たち、また、それらの人たちの子どもたちでした。在日外国人に対する行政の施策が皆無であること、また一向に収まらない民族差別と戦いながら協議が重ねられ、1988 年に「日本人と韓国・朝鮮人を主とする在日外国人が、市民としてこどもからお年寄りまで相互のふれあいを進めること」を目的とした施設が設立されました。それが、川崎市ふれあい館です。当時、公的な施設が「日本人と外国人のふれあい」を掲げるというのは、とても先鋭的なことでした。現在の桜本地区には、韓国・朝鮮人ばかりでなく、フィリピンや南米など多様なルーツを持つ人たちが暮らすようになってきています。その中でふれあい館では、お互いの文化を大切にする活動が継続的に実施され、音楽・舞踏の会や識字教室、中高生対象の学習サポート教室などがひらかれています。

■塩原良和研究会と川崎市ふれあい館の出会い

2009 年度春学期の塩原研究会では、外国人コミュニティについての本を輪読したり、差別についてディスカッションをしたりと、教室の中での課題を中心に活動していましたが、その一方で先生からご提案いただいたのが「教室外でのフィールドワーク」でした。ふれあい館での学習サポート教室は、指定されたフィールドワーク場所のうちの一箇所です。「学習サポートという名前だからといって、子どもたちが真面目に勉強しているところはあまり想像しないほうがいい」と先生から事前に伺っていましたが、それでも私たちが見た風景は予想外のものでした。

サポートが始まって 15 分、こない生徒に携帯電話で連絡。しかし返答もなく、「時間ちょうどにくることはあんまりないし、来ても、何も勉強道具を持ってこないかも。ごめんなさいね」。勉強道具を持ってこないで、何をしに来るのだ！？

いよいよ勉強が始まる様子だ。だが、まだ落ち着かないところは全くそんな雰囲気ではない。あるラッパーは女の子といちゃつき、ある子は先生のことを大声で呼び、またある子は戸棚の前で教科書を探す。そして僕は途方にくれる。

勉強が始まるかと思いきや、教科書を開けば「吐き気がする」といったり後ろの子に話しかけたり。ダンスが大好きらしくダンス部に入っているそうだ。しかしもっと他の団体でも踊りたい、またそれを公の場で発表したいらしい。

これはのちにゼミ生から寄せられたフィールドワークレポートの一部です。しかし、このような体験を通じ、ふれあい館に居心地のよさを覚えた一部のゼミ生はふれあい館で自然と継続的に学習サポートを行うようになり、他のゼミ生もふれあい館の子どもたちと携帯のメールアドレスを交換するなど、子どもたちとの交流を深めていきました。

このような交流もあり、以前から日本に住む外国人やその子どもを通して、多文化共生社会について勉強してきた私たちは、「社会を変えるための日常実践」に取り組むべく、あらためてふれあい館の門を叩き、FRIENDS PROJECT を始めることとなりました。

■タイムスケジュール

年/月/日	春学期実施概要
2008 年 9 月	塩原ゼミ開講
12 月	FRIENDS POROJECT 発足（1 期生による）
2009 年 2 月	ゼミ合宿
4 月	塩原ゼミ 2 期生入会
5 月・6 月	塩原ゼミ 2 期生、ふれあい館にて学習サポート開始 ＦＰのためのニーズ調査インタビュー開始
7 月	ゼミ生内ワークショップ体験 ゼミ内ＦＰ中間報告プレゼンテーション
8 月	メーリングリストによるゼミ内意見交換

FRIENDS PROJECT は、塩原ゼミ開講と共に少しずつそのカタチの模索が始まりました。

当初は、外国につながる子どもたちの大学進学への道を開くきっかけとなるようなエスニック・キャンププロジェクトやキャンパス・ツアーを計画していました。

2 期生、ふれあい館において学習サポートを開始。(1 期生は 2008 年度に既に体験済み）毎週木曜日の夜 7 時から 9 時まで、ゼミ生 2~3 人がふれあい館に通い、そのゼミ生のうち、2 人は定期的なふれあい館のスタッフとしてその後もふれあい館に通うようになりました。

2009 年 4 月に 2 期生が加わり、改めてＦＰを考え直すことに。そもそも子どもたちは、「大学進学」を望んでいるのかについて疑問を持ち、ニーズ調査として外国に繋がる子どもたちと関わりの深い学校や団体に 3、4 人のグループに分かれて、インタビューに伺いました。

それぞれのインタビュー内容は、紙媒体にまとめ、7 月のプレゼンにて全員で共有しました。

詳細は次頁参照

7 月には、先進的なワークショップの実践者である東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室、国際理解教育専門員の木下理仁氏よりワークショップを体験させていただく。

例）エアおおなわ、シール色分けゲーム
多文化政策優先順位シミュレーションなど

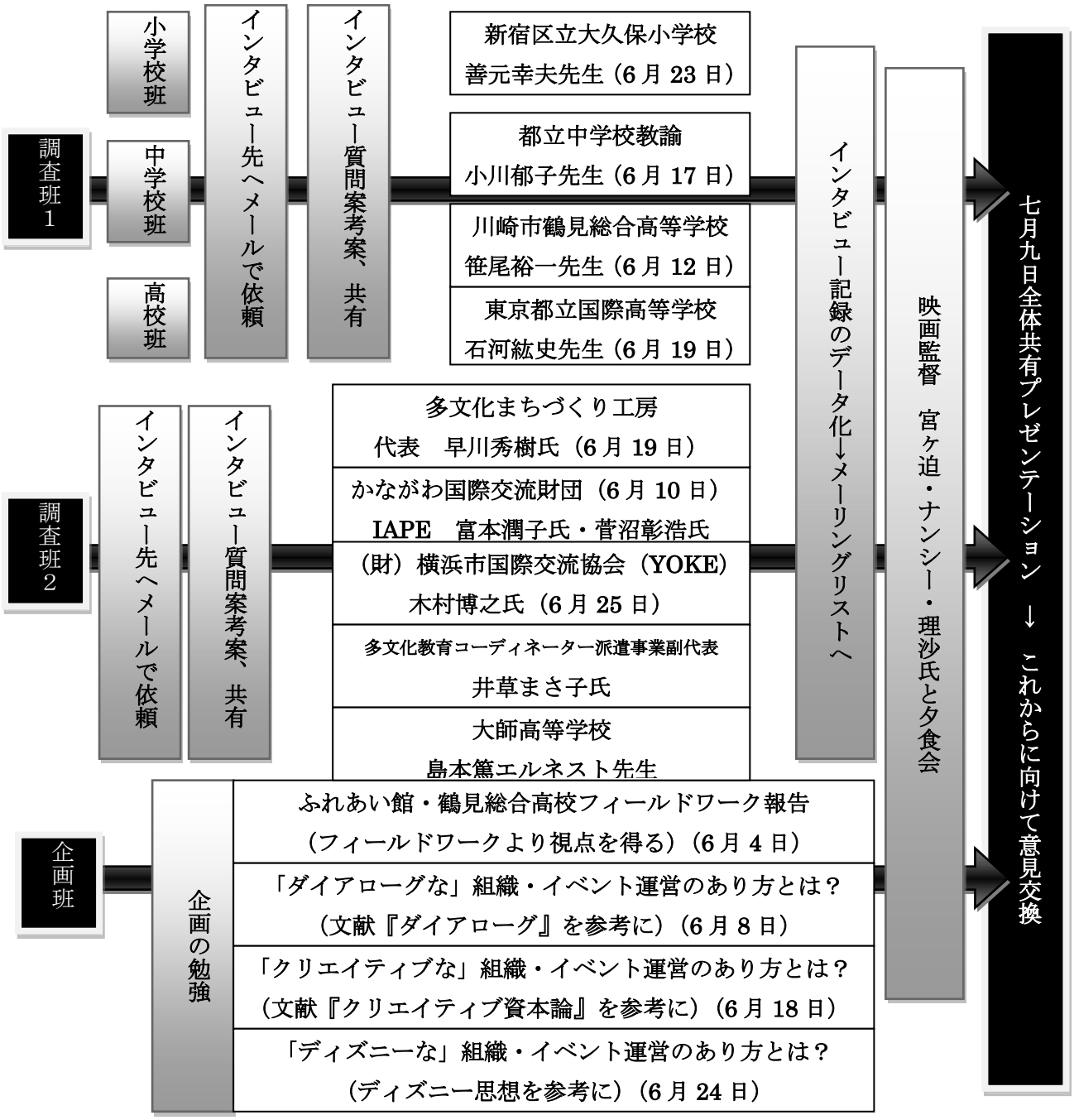
夏の長期休み中は、ゼミのメーリングリストに春学期の活動から学んだこと、そこから得たＦＰへのアイディアなどをゼミ生 22 人、先生それぞれ全員が意見を投稿し、9 月の合宿に向けて思考を深めました。

春学期班分け

調査班１	飯塚、井上、大川、佐藤、畑、蜂屋、服部、福元、宮本
調査班２	青島、大谷、中西、菊池、木村、橋詰、吉村
企画班	平山、貫井、石橋、高橋、徳島、細田

木曜日の午後に代表者会議を実施、各班から毎週一人出席し、班を越えた情報共有を行いました。

春学期はゼミ生 22 人が 3 班に分かれ、ＦＰのニーズ調査、企画に努めました。調査班１は、外国につながる子どもたちの支援を行っている団体へ、調査班２は外国につながる子どもたちの多い学校へ、企画班はプロジェクトの企画のノウハウについてサブゼミという形で学びました。ただし、企画班の中でも希望者は、1 班 2 班のインタビューに同行しています。



春学期活動より得られた知見

（8 月ゼミ生メーリングリストより抜粋）

２つの調査班と企画班で共通するキーワードがいくつかありました。
「居場所、主体性（自己表現、自己肯定）、アート、映像」です。

外国に繋がる子供達に対し自己表現の機会を作り、自尊心を育んでもらう。
子供達が自己肯定出来るようなきっかけを。クリエイティビティ。
（しかしゼミ生→子供ではなくゼミ生⇔子供、学びあい、どちらも主体的に取り組むもの！）

→フィードバックの必要性
　何をするにせよ自分（達）の作ったものが他人にどう受け止められたのか、反応を作成者（達）に届けてあげることは大切と思う。
　自己受容だけじゃ人間生きていけない。発表会や展覧会には色んな人に来てもらう。

　ただこの「承認の場」を外に求めてしまうと、無条件に承認してもらうことが難しくなると思います。たとえば、三田祭で第三者の来場者に感想を求めたりすると最悪認めてもらえないことも考えられるわけで。OBG 会も面白いですが今年は残念ながらなし。となると内輪完結型でいいと思います。

１．多様なアートによる自己表現の実現と、それをまとめるものとしての映像作品作成
２．本ゼミのＯＢＧ会組織の活用
３．ＳＮＳの活用

「編集」はどうしても主観に基づくため、編集者にとって都合のよい部分を切り取ることが出来てしまうという危険性があると思います。けれど、この危険性を十分に留意したうえで「編集」を行うことは、むしろ、私たちにとってすごく勉強になるのかなとも思っています。
実際の作品づくりの際には、子供たちに主体になってもらって、子供たちの希望を最優先する。けれど、映像作りの際には、私たちが重要だと思ったことをつなぎ合わせ、時には時間軸も移動させて、「事実」をさらに意味付けしてストーリー化する。ここに私たちの勉強の成果を出していける、社会的意義のある作品にできるというポイントがあるんじゃないかなと思います！　ただ、上映会で映像をメインにするとなると、せっかく子どもたちが頑張って作品を作ったのに、最終的には私たちのさじ加減によって作品が調整されるという一種の暴力になってしまうのかなという懸念も残ります……。

◆主体性とは何か、主体的に生きるということ、を一緒に考えることをどうやって行うのか
→木下さんのワークショップをヒントに、なにか具体例を掲げ、解決案を共同で考えるなど、
共に「主体性」について考える方法を検討する余地あり

○ゴールについて○

何人かすでにおっしゃっていますが、何をもって成功とするのかがまだ曖昧かと感じています。
しかし「何が見えてくるかわからないけどやってみる実践」というのもすごく楽しみなので、一歩ずつ進むたびに「ゴール」を見極めながら進みたいなと感じています。

私はここ最近ずっと『多文化共生』という言葉に対して何か違和感をおぼえていたのですが、どなたかが使われていた「目的と手段」というキーワードが鍵になるのかな、という気がしました。多文化共生とは、私たちの活動の目的ではなく、手段なのだ、と感じたのです。

＜ふれあい館＞

確かにふれあい館というといつもの生徒たちが思い浮かんで、ある程度自分の居場所があるように思えます。

だけど、ふれあい館まつりの際に思ったのは、あの地域にはまだまだ多様な生徒たちがたくさんいて、それぞれが多様な生活を送っているということです。きっとあの地域やふれあい館は僕たちが思っている以上に奥の深い何かがありそうな気がします。

対象を広げてオリジナルなものにするのもいいけど、ぎゅっと詰まった内容の濃いものにしたいなって自分は思ってます。なのでふれあい館との協働がやりがいもあって良いと思います！

＜不安事項＞

子どもたちに、この実践についてどう説明するのか、という点に疑問が残ります。

「皆には居場所が必要だから、一緒に自己表現することを通して居場所をみつけよう！」

私はひねくれ者なので、この言い方は「よけいなお世話だ」と感じてしまいそうです。
そもそも、「居場所がないだろう」はいい言い方ではないですよね。
私自身、居場所があると胸を張って威張ることもできませんし……。

「何か一緒にやってみないか？」

という誘いから始まるのかなって思います。
私たちも子供たちも同じ立場で、同じような結果を残したいという気持ちをこめて……♡

春学期の活動を経て、「大学進学」だけを目標にすることが出来ないと実感した私たちは、芸術を通じた「自己肯定の場の創出」を目的とするようになりました。同時にふれあい館の子どもたちとの交流をするようになり、ふれあい館という場所に魅力を感じた私たちは、様々な戸惑いを重ねながら、ふれあい館における実践を目指し、9 月初旬のゼミ合宿より FRIENDS PROJECT の体系づくりを始めました。

年/月/日	＜秋学期実施事項＞
2009 年 9 月 7 日～9 日	ゼミ合宿
9 月 24 日	映像制作研修１（永野絵理世さん：撮影の基礎） ふれあい館初打ち合わせ（1 班、3 班撮影開始）
10 月 3 日	2 班ワークショップ・撮影開始
10 月 15 日	映像制作研修２（永野絵理世さん：映像編集の基礎）
10 月 29 日	1 班撮影終了
11 月 5 日	三田祭用映像作品集中撮影日
11 月 7 日	2 班ワークショップ・撮影終了
11 月 23 日～11 月 24 日	三田際展示
12 月 10 日	ゼミ全体映像講評会
12 月 17 日	ＦＰ理念追究会議 ふれあい館上映会
12 月最終週	3 班映像集中編集週間
2010 年 1 月 14 日	3 班映像完成
1 月 15 日	日吉授業上映会（渡辺暁先生スペイン語）
1 月 18 日	三田の家上映会（協力：手塚千鶴子先生）
2 月 3 日	日吉来往舎ＷＯＲＫＳＨＯＰ型上映会
3 月 2 日～9 日	春ゼミ合宿を予定

2 班自分ＭＡＰとは、過去の自分から十年後の自分までの自分の人生を模造紙にイラストと文字で記したものです。

春学期の活動を経て、ふれあい館の子どもたちと協働実践をすることを決定。以降、三班に分かれて活動をすることに……。

ゼミ合宿

1 班
最初はバラエティ番組を企画
（料理番組、トーク番組など）
↓
子どもたちと話し合い
↓
男の子グループ
（映画製作）
女の子グループ
（ミュージッククリップ製作）

2 班
ワークショップ企画
（料理・ガンダムづくりなど）
自己紹介
■ペアで自己紹介→他己紹介
■ゼミ生、子どもたち自分を表す３つのものを持ちより、それについて説明。
↓
自分ＭＡＰづくり
↓
自分ＭＡＰ発表

3 班
メイキング映像撮影
■定期ＭＴＧ
（毎月曜＋木曜）
・ＦＰ全体運営
・スケジュール管理
・三田祭準備
・上映会準備
全体映像製作

三田祭＋上映会＋ワークショップ＝アウトプット！
→3 月合宿　反省→来年度ＦＰ企画へ（予定）

Ⅲ. プロジェクトメンバー報告文

１班・３班兼任　高橋研一郎

FRIENDS PROJECT。
このプロジェクトがなんであったのか、その正体をつかみかねているのが今の正直な気持ちだ。

FRIENDS PROJECT に対する当初の過剰な期待が、現実に均されて萎縮しているのかもしれない。私がこのプロジェクトに持っている感情は二律背反的であり、「楽しかったね」の一言で済ませられるものではない。だからといって、あまり複雑に考えたくもない気持ちもある。

FRIENDS PROJECT を主観的に捉えるならば､それはとても有意義なものであったと思う｡単純に、映像を共に作って行く試みは楽しいものであり、そこには笑顔しかなかった。しかし、このプロジェクトを一歩引いた視線で眺めたときに訪れる不快感も確固として存在している。

川崎市にある、社会福祉法人青丘社運営のふれあい館に集まる子どもたちは、言わば〈社会的必然性〉によってその場所へと引きつけられている。彼ら／彼女らを取り巻く社会構造が、彼らをして支援を受けられる場所へと誘引している。渡日間もない子どもへの教育支援の不備という行政による怠慢や、経済的理由から民間の学習塾には行けないといった理由など、多岐にわたる様々な要因が彼らをしてふれあい館に集わせている。

しかし、私たちがあの場所を訪れ、そしてプロジェクトの終了とともにふれあい館を去った理由を誰か説明できるだろうか。私たちは、〈社会的必然性〉によって、あの場所にいたのではない。〈社会的必然性〉によって引きつけられた訳ではない私たちは、ある〈まなざし〉を持って、ふれあい館を訪れてしまっていたのではないだろうか。研究、調査、興味、関心、同情、正義感、倫理観、呼び方は何でも良いのだが。物騒な〈まなざし〉を携えて行ってしまった私たちの在り方は、今一度真摯な反省を必要としていると、私は強く感じている。

FRIENDS、つまりは友達という呼び名には相応しくない〈まなざし〉への自分なりの反省の機会こそが FRIENDS PROJECT が私たちにもたらした、最大の成果ではないだろうか。

FRIENDS PROJECT 映画担当　　高橋　研一郎

【コラム】 ＜学習サポートと FRIENDS PROJECT> 菊池美峰

授業で行ったフィールドワークのあと、本当に「なんとなく」の気持ちから学習サポートボランティアに関わり始めた私ですが、何となくの中にも様々な驚きや発見がありました。例えば、子どもたちから「先生」と呼ばれること。私は単純にふらっと、「人手が必要なら行きますよ。勉強なら協力できること多いですよ」と手助けをしに行っている感覚だったので、なるほど、勉強を教えてくれる人は無条件で先生になってしまうのだな、と新鮮な驚きがありました。それと同時に、少し残念な気持ちもしました。「先生と生徒」という風に関係が固定化されてしまうことは、人と人とのつながりに限界を持たせてしまうような気がしたからです。あんなに面白い子どもたちなのに、彼らにとって私がただの先生だなんてつまらないな、と。

フレンズプロジェクト中もその後も、参加してくれた子どもたちに私が直接関わる機会は少なかったので、プロジェクトが彼らに何か変化をもたらしたのかは分かりません。私に見えていないだけかもしれないし、何も起こらなかったのかもしれません。ただ確実に思うのは、子どもたちは大学生のことを「先生」とは見ていなかっただろうな、ということです。「変な奴らがきた」とは思われたかもしれないけれど、関係性は固定化されなかった。それって、こちらの働きかけしだいで、いくらでも新しいものが生み出せる可能性を秘めている、ということではないでしょうか。

１班　徳島えりか

私たち１班はダンスクリップを作りました。完成した映像はオシャレで、素人の私たちのダンスもなんだか素敵に見えてきます。しかし、その制作過程は行き辺りばったりでした。第１回の話し合いでは、ダンスも選択肢に入ってはいましたが、料理を作る、ドラマを作るなどなどたくさんの意見が出ました。その中で結局ダンスに落ち着いたのは何故かというと、ＪやＡちゃんたちがダンス好きで、いつも踊っていたことが大きいです。ダンスなら彼女達も快く協力してくれるはず、そう思いました。また、私たちはダンスに苦手意識を持っている人が多かったこともあります。いつもは勉強を私たちが彼女たちに教えていますが、今度は私たちが彼女たちにダンスを教わる、という関係性の逆転に可能性を見出したのです。とは言いますが、あの場でそこまできちんと考えていたかと言われると、正直私は無自覚でした。なんとなく彼女たちと一緒にやってみたい、という思いだけでダンスの練習を始めました。

勉強を教えている時には、集中力も乱れがちだった彼女たちですが、いざダンスの練習となると目の色が変わります。音楽を休み無く流し、スパルタ式での練習でした。そして私たちが音を上げて休憩している間も、彼女たちはひたすら踊り続けていました。ダンサーになりたいと話していた子もいましたが、ダンスへの情熱をひしひしと感じることができました。また、みんなで踊ることで、休憩中に他愛も無い話もしました。文化祭の準備をする中で少しずつ打ち解けていくように、少し距離が近づいたような気がしました。収録が終わった後は、全員が「やっと終わった！」という気持ちを共有していました。私は、彼女たちが外国から来たことなんて忘れるくらい、夢中にダンスしていました。私のように日ごろ外国の人に接する機会の無い人間にとって、彼女たちと関わった。向き合った。一緒に何かをした。これだけで大きな収穫でした。

１班が彼女たちにできたことと言えば、「非日常」を提供することだけでした。だからこそ彼女たちが楽しめる期間に、楽しめる方法で活動する必要がありました。今回いつも行き辺りばったりだったと前述しましたが、もちろんこれは反省すべき点であり、評価するべき点だったとも思います。それは彼女たちの反応や声を盛り込みながら進めていくことができたからです。そして完成したビデオクリップにパッケージとしての「かっこよさ」を求めたのも、彼女たちが見てドキドキワクワクするものにしたかったのだから、当然のことだったのではないでしょうか。

私はこの FRIENDS プロジェクトで「希望」を感じることができました。ですので、私にとって１班の活動は成功でした。もちろん失敗だったと思っている人もいるかもしれませんが、FRIENDS プロジェクトはゼミ員の多様な考えを、認め合い尊重し、来年に活かして行く。そういう活動だと思っています。あとは、一緒にダンスした彼女たちが小さくても「希望」を感じてくれていたら、最高に幸せです。

１班　貫井あゆみ

外国につながる子どもたちと、同じ目線、対等な関係で何かをつくりあげる。最初はその目標に対して実際どうすれば良いのか、頭の中のイメージがうまくついて行きませんでした。ダンスという大まかな方向性が決まったときも、彼女らの一番生き生きとした表現手段を作品制作のツールとすることに期待はあったものの、では具体的にどうすれば「一緒に」作ることができるのだろうか、そこに意味を見出すことはできるのだろうか、という不安要素のほうが大きかったです。

実際にプロジェクトを終えて振り返ってみると、対等な関係で取り組むことはできたと思います。ダンスで、というわけではなくて、「一緒にダンスに取り組んでいること」をきっかけとして、それまで感じていた垣根を越え、他愛もない会話が楽しめるようになっていました。仲間になった、というイメージです。

ただ、一緒にひとつのものを作り上げることができたのか、というと少し疑問も残っています。私たち大学生は彼女ら高校生の得意とするダンスを教えてもらった。それをきっかけに仲間として話ができるようになった。彼女らの生き生きした側面に触れることができたし、作品制作という目標も共有することができた。それでも、何か表面的な交流しかできていないような歯痒さが残ってしまいました。

話は少々ずれてしまいますが、私は中学・高校時代、創作ダンスをやっていました。創作ダンスはダンスを通して伝えたいテーマをストーリーのように表現するものです。同じテーマであっても個人個人の考えるイメージは異なり、その表現方法にも違いがあるため、ひとつのテーマを作品として伝えるためには、それぞれがどのような思いを描いているのかチームで話し合い、試行錯誤を通して、より良い表現方法を探していく過程が必要でした。

今回の実践においても、そのようなプロセスを踏むことができれば良かったな、と私は思っています。ダンスが得意でない人もいますし、創作ダンスをするわけでもないので、そっくりそのままというのは難しいことですが。ただ、話し合いをして一緒に表現方法を考えていくことで、普段彼女らが感じていることと私たちが感じていることにどのような共通点・相違点があるのか、そして表現方法にはどのような違いが生まれるのか、考え理解し合うことができたのではないかと思うのです。そして何より、もっと心の深いところで対話することができたと思います。

このプロセスをダンス以外の表現でも使うことができれば、そして、スキルを必要とせず万人が楽しめる表現に応用することができれば、相互理解の可能性はもっと広がっていくのかもしれない。そんなことを考えさせてくれるきっかけとなりました。

１班　橋詰美緒

ＦＲＩＥＮＤＳ　ＰＲＯＪＥＣＴにおける私たち１班の役割は「Co-makers」でした。ふれあい館の学習サポートに来ている高校生たちと塩原ゼミの大学生が「共に」映像作品を「創る」。その中で「多文化共生」を手探りで発見し表現しようというのが当初の目的でした。そのため、映像の中でできるだけありのままの姿を大切にしよう！　素を出していこう！　と考え、「ありのままの映像」といった時にまず思いついたのがバラエティ番組の制作でした。トークコーナーや、料理コーナー、コントやドラマなど様々なコンテンツの制作を通して、高校生と大学生で一つの番組を「Co-make」しようとしました。しかし、時間の制約などからコンテンツは一つに絞ることになり、結局高校生３人共が好きなダンスをすることになりました。

ＦＲＩＥＮＤＳが始まった当初は不安なことばかりでした。ダンスなんてやって意味はあるのか？子どもたちは楽しんでやってくれるだろうか？子どもたちはこんなことやりたくないのではないか？これは一方的な押し付けなのではないか？そもそも本当に映像制作なんてできるのか？
何ができるのかわからない、どうなるかわからない、先の見えない状態に焦りを感じていました。一体どんなものができあがるのかとても不安でしたが、実際のダンス練習が始まるととてもそのようなことに悩んでいる余裕はありませんでした。当初「ダンスと言ってもそんなに難しいものじゃないでしょ…」と甘く見ていた私は高校生が教えてくれる早くて難しい振付についていけず、覚えるのに必死でした。生き生きと踊る高校生たちのエネルギーに圧倒され、運動不足な私はすぐにバテバテになってしまいました。休憩して座っていると「先生、もう一回やるよ」と言って腕を引っ張られ、スパルタ指導が再開しました。その時私は学習サポートの時に「ほら、次やるよ！」と言って生徒を促していた自分の姿をふと思い出しました。ふれあい館の学習サポートでは勉強を教え、「先生」と呼ばれていた私たちがＦＲＩＥＮＤＳでは高校生に教わり、怠けていると怒られる。ＦＲＩＥＮＤＳ中は普段の私たちと高校生の立場や関係が逆転していました。「ダンス」を踊っている間、私たちは何も違いませんでした。何も違わないというのは、年齢や国籍、学歴など関係なく、ダンスを踊っている間は「No border」の状態にあり、限りなく対等に近い関係にあったということです。当初「高校生が好き」という理由でたまたま選んだダンスというコンテンツですが、ダンスが言葉を使わないツールであったからこそこのような関係性が築けたのだと思います。撮影の日、私たち大学生は高校生のトレードマークである「制服」を着て踊ることにしました。理由は外見もそろえることで高校生と精神的な距離も縮めることができると思ったからです。大学生の私たちが昔一度は着ていたことがある「制服」を着ることで、彼女たちとの対等性、そして「No Border」を表そうとしました。

反省点は多くありますが、その一つに私たち１班の目的は「作品」を作ることだったのでダンスを撮影するまでのプロセスは映像に含まなかったことです。そのプロセスの映像をカットしたことで何も知らない人が見た時に「わけのわからない」映像になってしまいました。もう少し一人一人にフォーカスして考えていることや感じたことなどを共有し、映像に含めることができても良かったのかもしれません。

１班　平山絵理奈

「楽しかった！」それが制服ダンスの映像撮影が終わったときの率直な感想です。まさかこんな気持ちになれるとは思ってもいませんでした。

約１年前から始まったプロジェクト。ゼミ生から挙がる様々な内容や対象者の中で、今回の協働が行われることに決まりました。正直に告白すると、私は外国につながる子どもたちという対象に始めからそこまで関心を持てずにいました。内容についても浅はかで、それをやったからどうなるんだろうという疑念がずっと胸にありました。

ふれあい館との協動が決定して、川崎に行かなくてはならなくなったとき、始めは本当に憂鬱でした。自宅から遠いことも含めて、打ち解けられるか、ちゃんと話ができるのか不安だったからです。しかし、思っていたより打ち解けるのに時間はかかりませんでした。

初対面から笑顔で接してくれたフィリピンにルーツを持つ女の子、A。多分Aがいたから、ＪやＶともわりと早くに打ち解けることができたのだと思います。それでも何故かダンスをすることに決まって、私にとって初めての練習の日は、特別教えようともせず前の方で楽しく踊っている彼女たちを見て、もっと教えてくれれば良いのにと思っていました。ダンス経験もなく全く踊れない私はただ悔しさともどかしさを感じ、デジカメで撮影してふれあい館に行く前の日に練習したりしました。早く同じ場所に立ちたくて、追いつきたかったのかもしれません。何回目かの練習の時、音楽が流れないからダンスが踊れないとなった時、ガラスに映る場所を前にどうしてもよくわからない部分を教えてもらいました。その時くらいからでしょうか、ふれあい館に行って彼女たちを見ると安心感すら覚えるようになったのです。ダンスもだいたい流れがつかめるようになってきたら、一緒に教えながら踊ってくれるようになりました。聞けばとても親切に教えてくれるようになりました。

休憩時間には恋バナをしたり、フィリピンの言葉を教えてもらったり、進路の話、一人暮らしの話、いろいろ聞きました。その時、私の中での彼女たちの印象ががらりと変わりました。私は、彼女たちは将来に対してのしっかりしたビジョンを持っていないのだろうと決めつけていたのです。しかし違いました。とてもしっかりとした考えを持っていたのです。（私が言うのもなんですが、）ちゃんと考えていることを知って安心しました。

それから衣装の話が出た時は、完全にノリで制服をチョイスしました。最後の撮影日には失敗しないように、必死で踊りました。始めは負担に思っていたはずが、すごく楽しかったのです。一緒に何かをするってことがこんなにも楽しいということに改めて気づかされました。そして終わったあと写真を撮っているとき、「あぁ私この子たちのこと好きになったんだな」と思いました。

そういう意味でたとえ手探り状態であってもプロジェクトに参加できて良かったと思います。…彼女たちにとって私達はなんだったのだろうかという疑問は残っていますが。

今回のプロジェクトで私は、①教える・教えられる立場の逆転(ダンス)、②同じ目線に立つ(制服)、③対話（フリートーク）を通して、直接交流するために歩み寄ることで心が近づいていくことを実感することができました。まだまだ考えなくてはならない課題は山積みだし、彼女たちにとっては大学生に振り回されただけで何にも得たものはないかもしれないけど、私は彼女たちと出会えて良かったと思っています。これから生活する上で、彼女たちの存在を認めて生きていくことができると思うからです。こうやって少しずつでも「知っていくこと」が多文化共生社会の実現には必要不可欠だと思いました。

【コラム】　＜あのダンスは何ダンス？＞　橋詰美緒

私たち１班が映像の中で高校生たちと踊っていたダンス、あれはどういうダンスだったのでしょうか？　実は私たちも詳しくは知らないのです(。。;) ……が、どうやらフィリピンの高校生の間で一時期ブームになったダンスのようです。マイケルジャクソンの “Bad”、恋のマカレナ、Y.M.C.A など有名な歌をちょっとずつつないだ音楽に合わせた振付は、ヒップホップありディスコあり民族舞踊ありのまさに「多文化」な踊りでした笑

では彼らにとってこのダンスはどういう意味があったのでしょうか？　一緒にダンスをした高校生が３人とも振付をよく知っていたことや FRIENDS PROJECT に直接参加していなかった他のふれあい館の生徒たちもこの曲やダンスを知っていたことから、あくまでも勝手な推測ですが、このダンスは子どもたちにとって何か「カッコ良さ」を表すものだったのではないでしょうか？　思い返してみると確か私が小中学生だった時も「ミニモ二」や「プッチモ二」が一大ブームで、学校では皆が休み時間にそのダンスの練習をしていました。上手く踊れる人＝「カッコいい」人だったので私も一生懸命練習していた記憶があります。このダンスも彼らにとって「ブームにのってるイケてる高校生」の象徴のようなものだったのではないかなぁ……なぁーんて思いました。

http://www.youtube.com/watch?v=r2hBh-PiF1E

ゼミ生が子どもたちからダンスを教わる際、
参考にした You tube の映像です。

１班　細田瑞穂

「私たちのやっていることが、どこがどう転んだら多文化共生につながるのかわからない」
完成した３班の映像には、自分の言葉が冒頭に使われている。この発言を不謹慎と思って使ってくれたのか、共感して使ってくれたのか――。

私たち１班のプロジェクトは、最初の計画とはずいぶん違ったものに仕上がった。「ダンス踊るらしいよー」と聞いたときは、なかなか驚いた。高校の時のダンスにまつわる苦い思い出がふつふつと蘇った。
しかし実際に踊ってみると、私にとって最大の発見がそこにあった。それは立場の逆転に気付いたことである。嫌々物事を強制されることが、こんなにも辛いことだとは思っていなかった。私にとってはダンスがそうだが、彼女たちにとっては日本語や日本で暮らすこと自体がそれに当たるのではないか、しかもその苦しみは私がダンスをする苦しみとは比べ物にならないほど大きなものだということを痛感した。私は新宿区大久保のアジア人街の近くで育ったため、小学校の頃からニューカマーの子どもたちと机を並べていた。しかし、そのときもそれからも、彼らのことを理解できないでいた。日本の学校にいるのに中国語だか韓国語だかで会話する彼らに、不信感を抱いたこともあった。
そんな、１０年間も理解できないでいた私の心の中にあったわだかまりは、ダンスを踊る、という一瞬の出来事の中で溶けていった。
　このようにＦＲＩＥＮＤＳプロジェクトを通して、私には貴重な収穫があった。しかし、彼女たちにとっては何か得るものはあったのだろうか。彼女たちにとってダンスとは日常であり、そこにいきなり大学生が現れ一緒に踊ったにせよ、私が経験したような思考のコペルニクス的転回はなかったのではないかと思う。そういった意味で、「私たちのやっていることが、どこがどう転んだら多文化共生につながるのかわからない」と私は発言した。
　しかし今、ふと思うことがある。私自身の意識が変わっただけで、それは十分多文化共生の第一歩なのではないか。社会を構成するのは一人ひとりの個人である。その個人が、たとえ一人であっても意識を変えることができた。それは小さな一歩であっても偉大な一歩につながるきっかけになったのではないか。
　おそらくこのＦＲＩＥＮＤＳプロジェクトがどう多文化共生につながるかと言えば、それは長い目で見ていくべきである。小さな一歩を踏み出した私が、これからどう世の中を変えていけるか。そこにＦＲＩＥＮＤＳの真価が問われるのではないか。そして私だけでなく、このプロジェクトにかかわった全員がこれからどう行動するかでプロジェクトの意味付けは変わっていくのではないだろうか。これまでの実践を、これから無駄とするか人類の偉大な一歩とするか。もちろん私は後者のためにこれから少しずつでも社会を変えていきたい。

　ちなみに私の一番の後悔は、なんといってもダンス収録の当日、体調を壊しふれあい館に行けなかったことだ。そして制服を着れなかったことだ。クローゼットをひっくり返し探し当てた高校のセーラー服、未だ部屋の片隅に置いてある。来年への準備は万端だ。

１班　宮本翔太

思えばこの FRIENDS PROJECT との関わりは昨年の 4 月の入ゼミ統一選考でのグループディスカッションから始まっていた。あの当時の私もまだまだ未熟で、議論にほとんど参加できなかったのをよく覚えている。ゼミ入会以降もゼミの仲間に引っ張られて何とかついていくのが精一杯だったように思う。企画段階でのインタビューや幾多にも繰り返される議論に参加こそしたものの、大した意見も言えず、役に立てなかったなぁと反省している。

11 月になって、映像の編集の仕事をすることになった。10 月のふれあい館での撮影においても、高橋君に指示されて照明係りをやったり、後片付けをしたりするだけだったので、お客様同然だった。だから、この映像の編集をやることになったときは、やっと自分も何か役に立てるかもしれないと思いうれしかった。しかし、同時に不安も大きかった。映像編集などやったこともなくて何から始めればよいのかもわからず、期限内に仕上げることができるのか自信がなかったのである。だが始めてみると意外とおもしろく、またダンス班の仲間だけでなく他の班のゼミ生も助言をくれたりしてみんなが協力してくれた。結局映像もうまく編集できなかったが、自分も本プロジェクトに関与できたという意識や、仲間とのつながりを実感できたことは大きな収穫だった。

ここまで、本プロジェクトにおける私の個人的な経験を書いてきたが、実はこの経験は外国につながる子どもたちの暮らしとも、通じるところがあるのではないかと私は感じている。4 月に塩原ゼミに入会したが、ゼミの仲間が自分とは異なって非常に個性の強い人ばかりだった。この中で本当に私はやっていけるのだろうかと不安も感じたし、自分に自信がなくなってしまった。新しい環境に足を踏み入れるということは、同じ国の中の同じ大学という極めて同質的な集団においてすら、不安が伴い、自分を見失いそうになることもあるのだ。外国につながる子どもたちの経験してきた環境変化は私が経験してきたものとは比べものにならないほどの大きな変化である。きっと強い不安を感じ、自分に対して自信を失くすこともあったであろう。彼らがそれを乗り越えてここまでやってきたのだと思うと、尊敬せずにはいられない。また、私は本プロジェクトの一員として役に立てていないことを気にしていたが、彼らの場合も同じであろう。彼らは外国からやってきて主体的に暮らしているのにも関わらず、社会の中でお客様のように扱われてしまうことがあるだろう。自分が社会と関わり合えていない、社会の役に立てていないと感じることほどつらいことはないのかもしれない。私の場合、もっと能力を磨き、積極的に発言するなどすれば、状況を打開できたかもしれない。しかし彼らの場合、能力があったとしても認めてもらえなかったり、積極的に発言しようとしても言葉が出てこなかったり、おまけに差別や偏見のために対等に向き合ってもらえないということまでもあるのだ。もちろん彼らは社会にやさしくされたり、平等に役割を配分されたりもするだろう。だがそれだけでは不十分であるということを私は実感した。自らの役割を通して、社会とつながっていることを体感することが大切であり、それが自分に対する自信にもつながるのである。そのことに気づかず、いつまでも彼らをお客様として扱ってしまうような社会は、外国につながる子どもたちだけでなく、その社会に暮らす全ての人々を不安にさせてしまうようになるかもしれない。昨今取り沙汰されている無縁社会というテーマは、正にこの問題の延長線上にある。外国人を客体化してしまうように、隣に暮らす住人を客体化してしまう。この問題は決して他人事ではないことを私たちは肝に銘じなければならない。生きている以上、みなが主体的に暮らしているのであって、誰一人お客様ではないのだ。いつまでもお客様扱いしてしまうことが、相手をどれだけ不安にさせてしまい、どれだけ社会につながりづらくさせてしまっているかを理解し、一人ひとりが平等につながりあえる社会を目指さなければならないと痛感した。

２班　青島沙紀

今回のプロジェクトにあたり、私は約１年ぶりにふれあい館に訪れた。しかし去年の訪問と違い、ふれあい館の子ども達に自分を覚えてもらい、短い時間の中でも、彼らと時間を共にすることで何かしらの“結果”をもたらさなくては、という意気込みがあったことを覚えている。私たちの班では最終的に将来の自分に向けてビデオレターを作ることを目的とし、その過程で過去の自分を振り返り、今の自分を見つめ、将来を描くことができればと考えていた。私にとっては、塩原先生から見せていただいた「レモン」を制作したルマさんのように、子ども達がこの機会を通して自分を理解し、成長するきっかけとなれば良いと思っていた。

こうして始まったプロジェクトだったが、実際は期間が短すぎるし、子ども達が集まらなかったりと予想していたものを作るための環境そのものが整わないことが多々あった。しかしそんな中でも、子ども達はとても気さくに話しかけてくれ、思った以上に打ち解けることができた。私自身が特に関わることの多かったＹ君は、彼らの中でも１番おしゃべりで、陽気な子だった。ふれあい館の先生が言うには、彼の家庭環境は複雑であり、彼自身も会話の中で淡々と自分の家庭の話をする。その内容は私自身の生活とは全くかけ離れたもので、私は彼の話にどんな風に返事をしたら良いのか分からなかった。彼自身も特に私の返事が聞きたかったわけではないと思う。しかし私は、常に、大学生として、１人の人間として、どう応えることが彼の心を動かすのか、そんなことばかり考えていた。結果的には、最後の回で将来の話をしたとき、それまでは冗談か本気なのか「やくざになる～」と答えていたのに、「大学に行って、いい会社に行く」とか「ＮＢＡの選手になって結婚して子どもでバスケのチームを作る」という素晴らしい夢を語ってくれ、私たちはとても感動したし、映像としてもキレイにまとまったと思う。しかしその後、彼が日本を離れ、故郷に帰ると聞いたとき、最後の回では、彼が私たち大学生の望むものを察知して、私たちが期待することをしてくれたのではないのかと感じた。年齢は下だが、人生における経験値は間違いなく彼の方が多いのだ。それは例えば、親に対する反抗心は強いが、その反面お姉さんのことをとても信頼していて、そのお姉さんに対する愛情表現をストレートにする点からも伺えた。中学生の男の子とは思えない程、しっかりしていて、冷静だった。結局、彼に影響を受けたのは私だったのではないだろうか。

今回のプロジェクトを通して、本来私たちが行おうとしてきたことは、短期のプロジェクトという形式で行なうこと自体、難しいものだと感じた。日常をもっと共有しあい、何気ない会話を交わし、もっと深くお互いを知らなくてはならない。だから今の 3 年生のように、長い時間をかけて定期的に子ども達と顔を合わすことはとても大切だと感じ、1 年後、そうした関係の下で改めてプロジェクトを行なうことで、今回とは違うレベルのものが出来上がるのではないかと思った。

２班　石橋春華

「イベントではなく実践を」、「子供たちに、主体的に生きてもらいたい」。そんなテーマが決まったとき、私たちがそれを叶えるためにたどり着いた案は、自分マップを作ることであった。その目的は子供たちに「時系列によって過去、今、未来の自分を見つめ直し、考え抜くことで夢を持ってほしい、やりたいことを探し出してほしい。そのきっかけ作りに私たち大学生が何か協力できるのではないか」というものであった（もちろんそれは当初、生徒たちの高校受験対策を含めた意味でもあったのだが。）

ところが蓋をあけてみたところ、彼らに夢がないなんていうのは全くの嘘だった。むしろ私たちゼミ生の前に現れた中学生の子供たちは夢で溢れていた。もちろん、それは現実的というわけではない。結婚したい、社長になりたい、シンガーになりたい、バスケ選手になりたい、医者になりたい。憧れなどを交えつつ、照れながらも、彼らはキラキラした目で夢を語ってくれた。中にはその夢の実現に向けて、既に具体的に努力をしている者さえいたほどだ。

しかし驚いたことに、彼らがその夢を実現させたいと思い描く舞台は現在暮らす日本ではなかった。そして彼ら全員が口に出したのは全て、母国であったり、生まれ育った場所であったのである。いつか国に必ず戻る。そしてその場所で自分の夢を叶える。彼らにはそうした、はっきりとした、ビジョンがあった。一体何が彼らをそう思わせるのだろう。彼らが語ってくれる学校生活のエピソードの中には、「つらい」だとか、「やめたい」といった否定的な声はほとんど出てこなかった。むしろ、決していいとはいえないような家庭事情のことでさえも、笑顔で語ってくれた。それは、もしかすると本来はそういった感情がありながらも、私たち大学生には見せなかったセンシティブでデリケートな強がりだったのかもしれない。しかし、彼らはその（形だけでも）笑顔あふれる日本の生活の中に自分の将来を見据えることはなかった。今に満足はしているけれども、未来の自分が描けない。それはどういうことだろうか。彼らは、日本に来る前の生活が幸せだったのだろうか。家族から当時の話を聞いてうらやましく思うのであろうか。それとも、向こうの生活こそがベストであるという魔法にかけられてでもいるのであろうか。私はこの答えを知ることができなかった。

日本で多文化主義を実現するならば、という大きなテーマをこの紙一枚に語ることは厳しい。今回のプロジェクトが果たして成功と言えるのかどうかさえ、その判断は難しい。繰り返しサポートを提供し続けること、と同時に周りの人たちに現状を理解してもらうこと。当たり前のことが、なかなかできずにいるからだ。

とはいえ、もし日本がこれから多文化主義的な社会を目指すのであれば、外国に繋がる人たちに希望のある明日提供しなければならない。そのためには、まずは大人の外国の方々が住みやすい社会の基盤を築いてあげること、これが先決であることは間違いない。

２班　大谷洸仁

自分の大切なもの紹介から始まり、自分 MAP 発表で締めくくった２班の活動は「振り返り」を通して対話を続けた活動であった。それぞれ約２回ずつという少ない回数であったが子供たちは「過去の自分」に出会い、方法を模索しながらも半ば無理やり引き込んだ私たちに向かって将来の自分を表現してくれた。自分が就職活動時に初めて自己分析を行ったときの苦しみと、それを他人に表現するときの恥ずかしさを振り返ると、快く活動に参加してくれた中学３年生の子供たちの意欲に強く感謝したい。自分がこのプロジェクトを通して惹かれたことがこの「自己表現の意欲」である。自分の周りで就職活動中の友人と自己分析について語り合う機会は多いのだが、子供たちの、明らかに大学３年よりもはっきりと自分の過去を細部まで人に伝えられる力に驚かされた。特に故郷の国に生活していたことを力強く語るその姿と、日本で生活してきた自分とを比べてみて、その原動力が「ルーツ」によるものではないかと感じた。進学など表面的な社会的問題ばかりに囚われて、彼らの人生の選択肢は狭まってしまっているという意見もあるが、少し見方を変えれば「はっきりとした過去の自分」がいることで、強く人生を歩いて行くことができる可能性を持っているのかもしれない。今回の２班の活動は普通では出会わない「過去の自分」に出会うきっかけを与えたことで、重大な分岐点となる中学３年の冬の彼らに未来の人生を少し照らしてあげることができたと思う。今回はスケジュールの関係上、中学生対大学生という構図になってしまったが、今後は同じ境遇に置かれている中学生対中学生という対話の機会を作ることで日常的に生活を共にしている彼らにまた違った化学反応を生みだすかもしれず、そういったセッティングも大学生にしかできないことのように思う。

【コラム】　＜普段のゼミ活動＞　蜂屋絵美里

塩原ゼミでは、FRIENDS PROJECT の根本となっているフィールドワークのほかにゼミの時間を使い、文献講読を行っています。そして、文献講読とフィールドワークに基づき、4 年生は各自研究を重ね、卒業論文を執筆しています。

【全体輪読】

吉富志津代『多文化共生社会と外国人コミュニティの力』現代人文社、2008 年
佐藤郡衛・吉谷武志 〔編〕『ひとを分けるものつなぐもの』ナカニシヤ出版、2005 年
ジョック・ヤング『後期近代の眩暈』青土社、2008 年
アンソニー・エリオット『自己論を学ぶ人のために』世界思想社、2008 年
クリス・ロジェク『カルチュラル・スタディーズを学ぶ人のために』世界思想社、2009 年
保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』お茶の水書房、2004 年

その他グループ輪読等 11 冊　他論文

【卒業論文 2009 年度一覧】

「情報流通ツールとしての多文化共生 SNS の可能性」、「ＢＯＰビジネスの可能性について」、「金融危機前後における外国につながる子どもの教育環境の変化について」、「現代社会におけるポピュラー音楽と若者のアイデンティティ」、「フランス社会における多文化共生」、「東京ディズニーリゾートの社会学的分析」、「日本における外国人留学生の就職活動」

２班　佐藤麻里絵

私は本プロジェクトにおいて、二班の「ビデオレター作り」に参加させていただきました。この「ビデオレター作り」というのは、「短い期間に様々な場所を移動する子供たちに対し、自分の過去を振り返り、整理するきっかけをプロジェクトで作れたら良いのでは。」という外国につながる子供たちに関わる方々へのインタビューの中で得た考えのもとに作られた企画です。

どうやったらふれあい館の子達に自分たちは受け入れてもらえるか、楽しんでもらえるか、皆の思いを引き出せるか、意味のあるものになるだろうか、といったことからもっと事務的なことまで、色々うんうん悩みながらスタートした実践でしたが、実践期間中はそれ以上に試行錯誤の日々でした。まず、ふれあい館の子達がこの時期忙しく継続して来られない、ということを完全に失念しており、当初の計画を方針転換せざるを得なくなりました。ほぼ一回完結の企画でどれだけ皆に有意義に過去を振り返って貰えるか、そして最終的にビデオレター、映像作品まで持っていけるか、焦ってスケジュールをこなすことに必死になっていたのを覚えています。今振り返れば、子供たちは本当に本当に！協力的に企画に参加してくれていたものの、内心「この大学生たちはいったい何をしたいのだろうか……。」と思わざるを得ない、説明不足な点も大いにあったのではないかと思います。反省しています。

最終的にこの企画は映像作品として一つの形を残すことが出来ました。いつか皆が大きくなったときに DVD を見返して、「ああ、俺こんなこと考えてたんだ～こんな奴だったんだ～。」なんてクスっと笑ってくれたら、本望です。ですが、作品として形になったこと以上に（当たり前ですが）実践中に私は本当にたくさんのことを得ることが出来、良い経験をすることが出来ました。そしてその多くは、ふれあい館の子達とのお喋りやおふざけの中にあったと思います。他のゼミ生達によっても既に指摘されていることですが、何気ない会話や、その中での皆の活き活きとした笑顔などの表情は、言葉では捉えきれない多くの感覚を私にもたらしてくれました。勉強は一時置いといて、皆でお喋りに興じ実践を行う、それだけの時間を頂けたからこそ得られたものです。この企画に参加してくれた子たちも、普段あまり会話することのないだろう私達大学生とお喋りをして、何かを（反面教師としてでも……）得てくれていたらいいのですが……。

そして最後にもう一つ、反省点を述べさせていただきます。今回、出来るだけ対等な立場で企画を遂行するために（押しつけ感を出さないように）、「高校受験をする子供たち」と「就活をする私たち」という中で共通点を見つけ、全員で同じようにワークショップや自分マップに取り組みました。しかし、こなすことに必死になって、企画における対等性の意識が足りていなかった部分があったことは否めません。ある程度の枠組みを決めることはもちろん必要ですが次回は、このような少し硬派な企画であっても、もっと子供たちの意見を（企画段階から？）汲んだより濃いものを行っても面白いと思います。

２班　畑宗太郎

FRIENDS は、来年度も継続していくはずであるから、この「報告書」は最終報告ではなく中間報告である。前期はニーズ調査にエネルギーが割かれたが、現時点で考える実質的な活動は後期に行われたことになるだろう。私はその中で２班に所属し、ビデオレター作りを担当した。この報告書を通して私は活動の過程を振り返り、来年に活かせる経験を明らかにしたい。

2 班はふれあい館のみんなと数回のワークショップを通じて今までの自分を見つめ直すことと、自分の将来について考えるという作業をビデオに収め、最終的にビデオレター風にするというタスクをもった班であった。これは大学生にとっては就活の自己分析であり、原さんに言わせれば高校入試の「自己表現」対策である。よって当初は、最後の回に入試の面接に似せた寸劇を撮ろうという計画だったが、インフルエンザや個人の用事などで参加が定期的ではなく、作業は円滑に進まなかった。そのため、毎回ワークショップをして、最終的には「自分マップ」の作成を目標にするという計画に改まった。ところで私は主に撮影と編集に携わったから、そこを詳しく書きたい。

＜技術的な面＞

2 班のワークショップは、私たちゼミ生も積極的に自らを開くことによってＹくんたちにもいろいろ語ってもらいたいと考えていた。しかし、後々編集するときの映像の全体の統一感を高めるためカメラは専ら私が持ったため、私はあまり自分を見せることができなかったと思う。もちろん毎週行って会話もたくさんしたから大方できたと思うが、少し 3 班寄りの位置だったかもしれない。また、音というのはビデオにとってはとても大事な要素で、編集の期に至って「使えない」映像がたくさん出てしまい、最終的に使える映像は限られてしまった。1 つの部屋で複数の会話が起こることは実はやめた方がいいかもしれない（マイクは自然な会話の妨げになる、という理由で不使用）。

＜内容的な面＞

最終的に出来上がったビデオは分かり易いひとつの大きな物語をなし、自分で言うのもおこがましいが、なかなかうまくまとまっている。私は自分で高校時代に作った DVD のように、後で観たときにほっとして、元気が出るような、そんな DVD を彼らに手渡したいという思いで編集作業に当たったことをまず断りたい。ワークショップはほとんど 1 回きりで前後のつながりはほとんどなかったため、最後の撮影が終わった時点で編集の見通しは全く立っていなかったが、その思いをひとつのガイドにすることにより、形にすることができたと思う。

このビデオに関して、「映像って怖いね。子どもたちは本当にその言葉の意味を分かって言っているかわからないのに」という批判（感想）を頂戴した。最終的に DVD の中にはあくまで一部の映像しか盛り込まれていないということだ。「一部」ということには勿論いい面と悪い面がある。簡単に言えばいい面は、エッセンスが強調され分かり易いということで、悪い面とはそのエッセンスが誤った、またはかなり恣意的に抽出されてしまうということだろう。私はこう考える。編集に当たった私は 1 回を除いて全部の回に参加し、「マズい」発言や活動時間外の様子も見てきた当事者の一人である。それら最終的に映像に残らなかった部分が私の認識と編集の過程に大きな影響を与えていると思うし、そういった会話が実際の私たちと中学生の人間関係ではより大きな意味を持っていると思う。そして DVD の内容はその「一部」ではあっても、逸脱しているとは思わない。

FRIENDS PROJECT は、アカデミックな結果を追求する装置ではないと思うし、絶対にそうであってはならないと思う。人と人の関係を、その対話を、1 番に考えることで私たちは大きく道を踏み外すということにはならないと思う。来年度は継続性がひとつの鍵になるだろう。プロジェクトとしての継続性、相手（今回の場合はふれあい館）との継続性、そしてひとつの活動の継続性（週 1 回 1 時間か合宿形式か、など）のバランスを考えながら、ゼミという限られた環境の中でできるだけよりよい活動を展開したいと思う。

２班　服部菜央

FRIENDS プロジェクトとは、結局何か、何だったのだろうかということを、４月からずっと考え続けてきた。この答えははっきりとはしないだろうし、それぞれの人にとっても違うだろう。しかし私なりに考え、ひとつの答えとしていきついたものは、「関係性の回復」である。何の関係性の回復であったのか、また回復とは何であるかということを、FRIENDS プロジェクトを始める前に考えていたこと、やっている最中に思ったこと、終わった後に振り返って考えたこと、と時系列に沿って以下に述べていきたいと思う。

FRIENDS プロジェクトを始める前、私には具体的にイメージが湧かなかった。話し合いの結果、日本にいる外国にルーツをもつ子どもたち、最終的にはふれあい館の中高生と協働をすることになったが、ニーズ調査を行うまで私は日本にそのような現実があることに、思いが至らなかった。そして同時に、可哀想だとは感じても、その現実は自分とは別の世界の話であったと思う。

しかし、プロジェクトが始まってから、そんなことはとても言えなくなった。否応なしに、彼らと私は関わるようになった。私は、初めて、「外国にルーツをもつ子供たち」という現実を、一人一人の人間として、リアルに感じたと思う。それと同時に、自分のやっていることは、何も社会構造を変えることには意味のないことなんじゃないかという不安を持った。(この考えは、先日授業内で述べた通りである)

FRIENDS プロジェクトは、自分にとって意味のあるものだったけれど、彼ら、もっと言えば社会全体にとっては意味のないものだったのではないだろうか。漠然とした不安を考えこんで、(何故か)大江健三郎による『沖縄ノート』を読んでいた。この本の一貫したテーマは、「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」というものである。このテーマを著者が考える中で、次の文章が出てくる。「本土の『良心的な』日本人にとって、およそ中和しがたい執拗な毒である、日本の方々には募金してもらうより日本自身のことを考えてもらいたい」(p177、「戦後世代の持続」より） FRIENDS プロジェクトは、ただ単に募金のようなことをするのではなく、プロジェクトを始める前の自分のように彼らの現実をリアルとして見ていない人々に、一石を投じるものであったと納得できた気がした。

人と自分の関係性を変えるには、２つの方法がある。一つは、自分は変わらずに、相手の方を変えさせるか。もう一つは、自分の方が変容するかである。外国にルーツを持つ子供たちと、日本社会の中のマジョリティは、向き合わなければならない。外国にルーツを持つ子供たちにとって、意味があったかはまだわからない。しかし、両社の関係性の回復の一歩として、マジョリティ側への変容を求めたのが、FRIENDS プロジェクトの成果であったと思う。

３班　井上若菜

ちょうど１年前のこの時期に、かながわ国際交流財団の菅沼彰宏さんに私たち１期生がその段階で考えていたエスニックキャンプのおおまかな概要と、今後のスケジュールのプレゼンテーションをした。菅沼さんは、どんな企画をする場合においても、何より継続性が大事であることを私たちに教えて下さった。何度かプロジェクトの対象となる子どもたちのところに足を運び、ある程度の人間関係を築く、アイスブレイキングという意味での継続性と、菅沼さん自身長年エスニックキャンプに携わってこられた経験から、その企画自体が一度限りのものではなく、継続的に行われることで、だんだんとプロジェクトの成果や、将来目指すべき方向性などが見えてくる、といったことであった。

２期生が４月から加わったことで、このプロジェクトは大転換を迎え、映像制作企画として本格始動した。残念なことに、撮影期間中に私は３度しかふれあい館を訪ずれることができなかった。その時点で、私はプロジェクトに継続的にコミットすることはおろか、保守本流である、ふれあい館での外国につながる子どもたちとの対話の機会を逃してしまったのである。ダンスや創作という言葉を使わない表現形態をとおして対話を重ねるごとに、ゼミ生と子どもたちの関係性は変化していった。映像の編集中に撮り溜めた映像をみていると、どことなく遠慮が見られる会話の中でも、「素」の姿が垣間みられるときがあり、映像を通してでしかそれを味わうことができなかったことが、とても残念である。映像制作担当の、通称「三客班」には大勢の明晰で個性的な頭脳が集まった。自分たちが見たこと・感じたことを、そのままの形でオーディエンスに受容してもらうためには、どのように発信すればいいのかということを、妥協することなしに考え抜き、「客観」であるべき自分たちの立場について悩みながら、プロジェクトは生き物のように、ものすごい勢いで融合と解体を繰り返して変化、成長を遂げていった。プロジェクトを通して、「理論じゃ説明できない何か」が確かに現実にあることを感じた、というとある２期生の声があった。まさにその「何か」を私たちは映像というツールで

再構築し、オーディエンスに発信したいのだが、私たちの意のとおりに受容してもらうためには、ある程度の恣意性と、理論化が必要だということを実感した。そして卒業論文の執筆にあたり、様々な研究者が唱える「多文化共生」のモデルを分析し、現実にふさわしい異文化共存の方法を考えた。しかし、ずっと頭の片隅にあったのは、これもまたとある２期生であるが、「あいつらはそんな複雑に考えてないよ」、とプロジェクトが終わってもふれあい館の子どもたちに毎週変わらず会いに行くゼミ生の声であった。私は継続の重要性という意味合いでは、今回の FRIENDS プロジェクトでは全くそれを果たせなかったが、それでも今後に繋げていきたいと思う貴重な経験ができたと感じている。

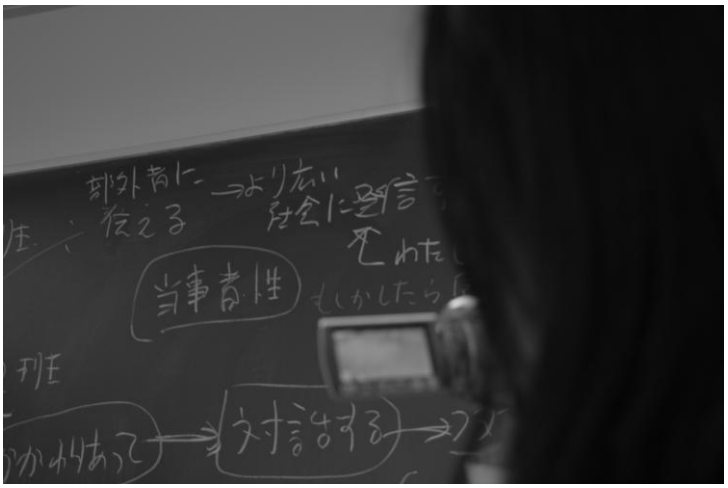
【コラム】　＜三客班という名前について＞　蜂屋絵美里

3 班は別名、三客（さんきゃく）班という通称で呼ばれていました。これは班編成が行われた 9 月の合宿時、何か班に名前をつけようと班内で話し合いがなされ、生まれた名前です。三つの「客」は、

「客観性」「観客」「客（かく）＝旅」

を司っています。「客観性」には、3 班は強い主張・意見を持たずに、１、2 班の活動を客観的に記録する映像を撮影しようという 3 班の最初の意気込みが込められています。「観客」には、合宿時の話し合い当初に語られた、最終的なＦＰの映像を社会に暮らすなるべく多くの人に見てもらいたいという願望、観客の方に伝わる映像にしたいという希望が込められています。そして、旅という意味を持つ「客」には、私たちのプロジェクトがまるで長い旅のような未知との遭遇、人との出会いの連続であるという意味が込められています。もちろん、「さんきゃく」という音には、私たちの最大のツールであるビデオカメラを支える「三脚」がかけられています。

このように 3 班結成時の班員の思いが込められている三客班という名前ですが、のちにこの三つの客は、「そもそも客観性とは何か」「観客は一体誰のことを指しているのか」「プロジェクトとはどのくらいの期間を指しているのか」という FRIENDS PROJECT の根本に問題を問いかける恐怖の問題提起装置に変貌していきました……。



３班　大川史織

本プロジェクトは、どの班に属し、何を行ったかによって、多様な解釈と物語が存在する。３班としてプロジェクトのドキュメンタリー制作に関わった私にとって、FRIENDS PROJECT は、映像を介した出逢いと、編集作業を通じた対話と省察の繰り返しであった。

実際に、ゼミ生とふれあい館を訪れる子どもたちが出会う場で過ごす時間よりも、映像編集作業を通じて、画面の中に映る彼/彼女らの表情を見つめ、その時の状況について想像をめぐらす。そうした時間の方が、はるかに多かった。その結果、初対面にも関わらず、すでに何度も画面で見た相手に対し、こちら側は親近感をもって接する。はじめましての子どもたちにとっては距離感が近すぎ、「あんた誰」と言われて、慌てて自己紹介をする。そんな、奇妙なコミュニケーションがたびたび生じた。まるで、テレビの中に映るスターと視聴者の関係性のような、一方的な理解を通じた、妄想にすぎないひとりよがりの友人意識を、このような状況に遭遇してはじめて、３班は気付いていった。

この３班の立ち位置を、当初はプロジェクト全体を俯瞰する客観的な立場と位置付け、メンバーは意識的にその姿勢を貫こうと努力していた。しかし、完全な客観性など、映像編集に携わる限り、存在しない。撮影、編集作業を自ら行うという経験を通じて、＜物語の形成者＝語り手＞になるということは、想像を超えた責任と権力が３班に集中することを意味する。プロジェクトの語りがゼミ生のみのものになってしまうことは、FRIENDS PROJECT そのものが、独善的な一方のみの解釈によって表現されることを意味し、対等な関係性の構築とは程遠い FRIENDS PROJECT の体制に、３班は何度も頭を抱え、自問自答を繰り返した。この行き詰まりなしに、私たち３班の存在は語れない。

映像制作を通じた気付きや反省によって、FRIENDS PROJECT はその都度問い直され、修正され、変化していった。その過程もすべて映像として記録したことによって、思考回路が可視化され、客観的に映像分析ができたことは、常に自分たちの行為をカメラの視点が捉えている、という映像の持つ力によるものである。誰のものでもない視線＝カメラ・アイによる記録の共有は、単なる「記録」に留まらず、「体験の共有」として FRIENDS PROJECT に大きな意義をもたらした。映像が可能にする多様な解釈が、決して画面の中に自分自身が映り込んでいては気付かない見方、聴き方、感じ方を私たちに与えた。映像を通じた双方向的なコミュニケーションが、映像作品から生まれ、それを喚起する作品仕立てにしたい。そのような願いから、撮影、編集、監督など作品づくりにおける自明の役割分担を、FRIENDS PROJECT では意図的にしなかった。できる限り、参加者全員の意見をくみ取り、対話を重ねた先に、生まれたアイデア、作品が FRIENDS PROJECT である、という認識のもとにあったからだ。FRIENDS PROJECT で得られたさまざまな混乱は、決して一人では得られぬものであり、映像制作という創作のもつ特性が、十分に活きたものであったと思う。そして、これからも、映像鑑賞を通じた対話が生まれる場を積極的に生み出し続けること。それが、終わりなき FRIENDS PROJECT に宿る希望である。

３班　菊池美峰

ＦＲＩＥＮＤＳプロジェクトを通して、いろんなことを学びました。外国につながる方々が抱える問題、それを生み出した社会構造、子どもたちが巻き込まれているいざこざ、それでも彼らがすり減らされずに持っている力。プロジェクトの企画や立案、リーダーなしでの会運営、映像作成の技術、無意味かつ有意義な話し合い。問題意識を共有した仲間と向き合うことで、ここまで色んなものが生み出されるのかと驚きました。

私が気をつけたいと思っているのは、「ＦＲＩＥＮＤＳプロジェクトを、自分たちだけのものにしない」ことです。三班という立場で、活動自体は子どもたちと共に行ったわけでもなかったし、「私たちは何を学んだんだろう」「何を生み出したんだろう」、上映会だパンフレットだ何だかんだと、正直プロジェクトを手のひらの上でこねくりまわしすぎました。ふれあい館の印象も、プロジェクトの協働者というより自分が個人的に行っているボランティア活動での方が強く、ともすると「このプロジェクトが協働実践だった」ということを忘れてしまいそうです。

プロジェクトを自己満足に終わらせないためには、来年度以降が重要だと思っています。「継続が大事」だということもそうですが、今回の三班のような立ち位置ではなく、おもいきり相手とぶつかりあい、何かを生み出すのが大事だという気がします。もちろん今回の三班は、それ自身とても意味があったと今になっては思います。三班としての活動を通した振り返りがなければ、プロジェクトに対する思いいれもここまで深まりませんでした。今年度学んだ経験を、来年度以降生かし、また違った意義をもつ活動を行いたいと思います。

【コラム】　＜子どもたちとデジタルと私たち＞　高橋研一郎

デジタルメディアの社会的普及によって、一般の消費者にも手の届く範囲で映像制作機器を購入できるようになった。ハンディカムのビデオレコーダーと編集ソフトがインストールしてあるパソコンが一台あれば、いまや小学生にでも映画が撮れる。

今回の FRIENDS PROJECT では、〈映像〉を通して何ができるのかということを考えてきた。一つには、三班が作成した映像がある。FRIENDS PROJECT を通して、ゼミ生が思い考えたことなどインタビューを通してすくいあげている。この映像作品の目的はどうあれ、この作品は第三者へと向けられたものであることには間違いない。この作品を通して、私たちは社会的コミュニケーションの可能性を探ろうとした。いわば、これは伝統的な映像制作と言えるかもしれない。そして、一班の映像制作においてはデジタルメディアの簡易性を発揮する試みを行った。ダンスクリップとショートフィルムの作成を通して友情を育むことが出来たのではないか。こうした、映像制作を通した人間関係の構築、それも異文化の人々の間での映像制作の持つあらゆる可能性は探求すべき価値のあるものであると思う。

FRIENDS PROJECT は、デジタルビデオという簡易的ミディアムが持つ社会的可能性を探る良い契機なったことは間違いない

３班　木村友紀

「多文化共生って何なんだろうなぁ。」

このプロジェクトを終えた今、改めてこんな疑問が私を悩ませている。

多文化共生とは、異なる文化間の交流だと考えられがちだ。確かにそうなのだが、その実践方法はそんなに大掛かりなものではなかったように感じている。それは同文化交流となんら変わりないものだった———。私は今回のプロジェクトを通して、多文化共生とは、一人一人が自分の習慣や文化を相手と分かち合い、その違いを理解し、受容していく個人間の交流に他ならないのだと実感した。つまりそれは、「ブラジルに住んでいた異文化の人と話す」のではなく、「ブラジルに住んでいた中学２年生、恐竜の絵の描いた袋がお気に入りで眼鏡がよく似合あうＹ君と話す」ものなのだ。それは実態の知れない異文化との関わりではなく、自分の前にまぎれもなく存在しているカレ・カノジョらとの関わりの中で行われたのである。

ふれあい館の子供達。顔立ちや習慣、母国が違っても、かれらと関わることは私たちがいつも初対面の人と行っている方法と何ら変わりないものだった。携帯電話の話をしたいり、好きな人の話をしたり、音楽や漫画といったサブカルチャーですんなり打ち解けることができたのもその証拠だ。その人を異なる文化人として身構える必要はなかったのである。

私はこのプロジェクトを行う前、多文化共生とはもっと大掛かりなものであると勝手なイメージを膨らませ、過剰な問題意識を持っていた。立ちはだかる異文化を自分はどこまで受容し、認め合っていけるのだろうかと、一人不安だったのである。

確かに、多文化共生は難しい。しかし「難しい」というのは、異文化と関わりのない人に、その実現方法が人間関係の構築と何ら変わりない事が伝わっていないからこその難しさなのではないだろうか。一方、そこには愛国心や排他的な考え方、宗教の違いによる争いなど、課題も山積している。事実、それらによって多文化共生を拒絶する反応もあるだろう。しかし、多くの人にとって多文化共生は、実に基本的な人間関係の中で行われるものである。この事実を知らずに、多文化共生に身構えている人はこの日本にどれほどいるのだろうか。私はそんな人々に、多文化共生が実は個人の関わりの中で自然と行う事ができ、「異文化」という大きすぎる壁の実態が本当は「歌手を目指し、ピンクが好きなＹちゃん」である事を伝えたいと思った。

私が今回フレンズプロジェクトで一番学んだのは、多文化共生が得体の知れない異文化との関わりではなく、自分と何ら変わりない○○君との関わりの中で、彼の背景に過ぎない異文化を理解していく事であるということだ。私たちが行ったプロジェクトはこの事を改めて確認するものであった。そしてこのプロジェクトをきっかけに、個々人が多文化共生を個人レベルで続けていくことの重要性を実感した。

３班　中西良介

「“いろんな味”というよりも“なんとも表現しがたい味”のプロジェクト」

FRIENDS をやっている最中にいつも考えていたのは、自分たちが取った選択はこれでよかったのだろうかということだった。これは特にふれあい館でほかの班の活動を撮影している時と、映像を編集している時に思っていた。この問いに対して明確に「OK！」と答えることができる判断材料はなかったし、構成を組んだ上で、どのシーンを入れて、どれを削除するかという取捨選択は「FRIENDS の理念」が自分の中でクリアになっていなかったこともあり、ほとんど感覚的な判断で決めざるをえなかった。3 班の中でいろいろと話し合って出来上がった映像は、予想以上に尺の長いものとなったが、FRIENDS で自分たちが経験した「なんとも表現しがたい味」を表現できたのではないかと思う。三田祭用に制作した短編映像を作る際に、アイスをモチーフにしてこのプロジェクトの内容やゼミのことを表現しようとしたが、そのとき考えていた「いろんな味」とはまた一味違ったものができた。

FRIENDS は協働実践で、ふれあい館の生徒と対話することが必要だった。あの場にいて一緒に時間を共有しているときは、彼らと対話をする。その時間・空間を切り取った映像を大学内で映像の視聴者向けに編集をするという作業を通して、まだ見ぬ相手と対話をする。この二つの対話は全く性質の異なるものであるし、必要とされる要素も全く異なっていた。前者は生の対話で双方向的であるのに対し、後者は対話とはいえ「自分」と「(自分の属する) 社会」との対話であった。この対話のイメージとしては、社会が円盤のような形をしているとすればその中心である自分のいる地点から、多様な考え方を持つ人がいる円盤の端のほうまで何往復もダッシュしているようなものである。この作業は大変だったがここで省察できたことは映像編集に活かせたと思う。またゼミ生内で繰り返し行われた話し合いでも、過程ごとに非常に多様な意見が出ており、自分の考えから抜け落ちていた視点からこのプロジェクトを見つめなおすことができたので、ここでの対話から得られたものも大きいものだったと思う。

FRIENDS は本格的に始まってから、自分が小中学生のころはどうだったかということをよく思い返すようになった。それまでは余り覚えてなかったが、小 2 の時には日本人とフランス人のダブルの転校生がいて放課後に日本語の勉強をしていたし、学校行事で朝鮮学校には何回も行っていた。当時は全然気にしていなかったが、自分の学校にも日系コリアンの生徒が何人もいた。当然、あの時は多文化共生という言葉も知らなかったが、同じ地域に住む同じクラスの生徒という、多少の差はあれども限りなく近い立場にいたからこそ、意識せずとも自然に対話できたし、友達になれたのだと思う。FRIENDS は年齢も違うし、住む場所も違う者同士で行ったが、決して友達になれないわけではないと思う。しかし、あるゼミ生が指摘したように、友達とはお互いに絶えず相手のことを気にかけている状態を指すはずなのに、このプロジェクトは大学のゼミ活動とはいえ、「期間限定で友達になる」という要素を拭い切れなかったように感じる。来年度からは、ゼミで 3 年生・4 年生が毎年内容を変えつつも継続して行っていく活動だからこそ、そういった点をクリアできるようなものを作っていってもらえたらと思う。

ふれあい館のスタッフの方々と生徒たち、プロジェクトや映像について指導してくださった方々、上映の機会を提供してくださった方々、映像撮影・編集のためにいろいろとサポートしてくださった塩原先生、いつも斬新的なアイディアを出して自分に新しい視野を広げてくれたゼミ生のみんな、たくさんの人に支えられてこのプロジェクトは今年度の活動を終えることができた。心から感謝いたします。

【コラム】＜三田祭発表映像＞　福元理央

2009 年 11 月某日、研究室の一室。二人の学生が、本や絵の具やクレヨンといった「机の上で使うもの」を材料としてアイスクリームを手づくりするも、お味は今一つ。何か足りない味がある…そうだ、「実践」だ！二人はビデオカメラを手に研究室を飛び出し、ふれあい館へと自分の足で出掛けていく。

これは、FRIENDS プロジェクトのプロモーション映像のあらすじである。机上のお勉強だけでは足りない、実践をしようという私たち塩原ゼミ生の活動理念を投影させたストーリーである。それならモチーフはアイスクリームでなくても、クッキーでもケーキでもなんでもいいじゃないかとお思いかもしれないが、私たちはあくまでアイスクリームにこだわった。それには理由がある。

一枚のお皿にのったバニラアイスとチョコレートアイスとストロベリーアイスを想像してほしい。暑い夏の日に、そのアイスクリームがお皿の上で溶けてマーブル模様に混ざり合ってしまう様子も。ついでに、すっかり溶けたアイスが入ったそのお皿を冷凍庫に入れて再び冷やすとどんなアイスクリームができるか、というところまでイメージしていただきたい。

そう、私達がアイスクリームをモチーフとしたのは、この「溶ける→混ざる→新しい味の完成」というサイクルに目をつけたためである。

日本人の大学生と、外国につながる子どもたち。言葉で語ると「私たち」と「彼ら」というように構造的に分けられてしまうが、実際にふれあい館で私たちが感じたのは、構造の壁ではなかった。むしろ、「私たち」を温かく迎え入れてくれた「彼ら」と、一緒にダンスを踊ったり自分マップの作業をしたり他愛もない話に花を咲かせたりするなかで、ぐちゃぐちゃに混ざり合った感覚を覚えた。そのときふれあい館で完成したアイスクリームは「日本人大学生」味でも「外国につながる子ども達」味でもない、全く新しい、クレオール的な NEW　FLAVOR だったのである。

３班　蜂屋絵美里

＜答え＞

本プロジェクトの特徴のひとつは、答えがないことであった。本来、プロジェクトと名付けられているものは、目的を明確化した上でその目標達成に少しずつ近づいていくものであると思うが、FRIENDS PROJECT に限っては、その「当たり前」がなかった。それがこの FRIENDS PROJECT という言い知れない試みの最大の強みであり、弱みであったと思う。

FRIENDS PROJECT は、主に塩原研究会のゼミ生と川崎市ふれあい館の子どもたち、そして先生、スタッフの方々によって進められていたが、それだけではなく、私たちゼミ生の背後にはいつも、「このプロジェクトの内容を伝えたい相手」がおり、それは人ではなく社会という大きな何かであった。そして、上映会用の全体映像を担当していた 3 班は特にその「社会」という見えない参加者との対話にずいぶんと悪戦苦闘した。

多文化共生という多くの価値観の共生を目指している以上、「私たち」だけで答えを出したくない。この映像を見てくださった方々が、それぞれ自分の答えを持つことが出来るようにしたい。だから、あえて映像作品の中で答えは出したくないし、だからこそ、このプロジェクトの目的は、答えを＜作らない＞ことだ。

それが 3 班の話し合いの中で繰り返された言葉であったが、だからこそ、プロジェクトの運営は難破した船から投げ出され、広大な海の真ん中を漂流している人間のように不安定であった。その中で私たちは泳ぐことをやめず、上映会というひとつの島にまでは行き着くことが出来た。しかし、そこで待っていてくださった観客の方々という社会の片鱗に、答えを考えていただくという本来の目的が達成できたかどうかと尋ねられれば、自信を持って頷くことは出来ない。海に足跡は残らないにも関わらず、私たちはそのことに少し盲目的になっており、濡れた体でいきなり社会に登場し、観客の方々に「さて、どうして濡れているのでしょう？」と問いかけてしまったような心地がしている。本来は、その島から観客の方々が自分の船を創り、新たな島へと旅立っていくための材料を私たちが運んでくる、もしくはその材料を運ぶための航路を確立してくるべきであったが、私たち自身、手さぐりであったために上映会の島まで泳いでくることに精いっぱいになってしまった。それが、1 月に 2 回行った上映会のおける来場者の皆様からの反応から伺えたことであった。ここから考えるに、今回のプロジェクトの反省点は、本来、ふれあい館―ゼミ生―社会という仲介役になりたかった私たちが、ふれあい館との対話に夢中になり、社会との対話がおろそかになってしまったところにあるということである。しかし、「答えを出さない」という試み、そして、だからこそ目的のために策略的にはならず、ふれあい館にまっさらな人間の心で飛び込んでいくことが出来たという経験を得ることが出来たことは、今回の FRIENDS PROJECT においてとても意義深いと私は考える。この二つを貫かなければ、社会の対話は出来ないのだという根本を私たちは忘れなかったのである。

今回、右も左もわからない初めての試みであったにも関わらず、上映会によって問題意識を社会に伝えようとしたことは無謀であったかもしれない。しかし、答えを用意しないプロジェクトには、答えのあるプロジェクトの何億倍もの時間と想像力が必要であるということ、それを今回、学ぶことが出来た私たちは、FRIENDS を一度きりで投げだすことなく、来年、再来年へと時間を繋げていくことが出来る。この気づきを与えてくださったふれあい館の皆様、先生、上映会へいらしてくださった方々への感謝の気持ちを活力に、改めて今、泳ぎだしたい。

本当にありがとうございました。Thank you very much!!

３班　福元理央

私は FRIENDS プロジェクトに 3 班（メイキング映像制作）として参加した。「世の中に向けて発信する」という理念のもと、「客観」を意識して編集作業を進めてきた。しかし私達はこの「客観」に苦しんだ。客観とは誰にとっても普遍的な事実であるが、それを作品の筋として描く事で、「この映像はこういうことを言っているので、こういう見方をしてください」と言い切ってしまう事は、私達３班の意には沿わなかったのである。

3 班、もとい私個人としては、あの映像に何か教訓めいたものを入れ込みたくないと考えていた。私達が出した何らかの結論をそのままストレートに伝える作品は、確かにわかりやすく扱いやすいものになるだろう。しかし、結論に重きを置き過ぎると、私達が行ってきた実践の意味が作品の中で薄らいでしまうと考えていた。実践ありきで出た結論だとしても、それをわかりやすく強調する事で、観ている人は「結局そういうことが言いたかったのね」という受け止め方をするだろう。そうなると、私達にとっては一番重要な部分であったはずの実践が、あたかも結論のための前置き・伏線かのように捉えられてしまうのではないかと考えたのである。

映像というツールを選んだのは、蜂屋さんが言った「言葉で表現できない表情などのニュアンスを伝えられるから」という理由に加え、観ている人に実践を追体験してもらうという狙いもあったと思う。起承転結が明快な「良い作品」を作る事も多分できた、というかむしろずっと簡単に作れたと思うが、実践の追体験をしてもらいたいがために意図的にゼミ生のぐちゃぐちゃした感情・思いを組み込み、複雑な構成にしたのである。3 班映像は完成品ではなく材料であり、上映会は作品を鑑賞する場というよりは、観ている人が材料をもとに自分で思考を切り拓いていく場であるという意識が、3 班全体として共有されていたと思う。だからこそ、2 月 3 日の上映会では観客をも巻き込んだトークセッションを企画したのである。

ふれあい館での実践を、プロジェクトという枠にはめて考えることはできないのだろうと思う。プロジェクトというからには、計画があり、それに沿った実行期間があり、チーム全体として何らかの成果を得ることが想定される。しかし私達の実践は、どこが始まりでどこが終わりかを折り目正しく定めることが難しく、またチーム全体としての成果というよりは、個々の感覚や経験に基づく個人的な成果の集積であったと思う。私達が最終的に目指す多文化共生社会も、もちろん「プロジェクト」的な規則性・普遍性を持った法や制度抜きに実現させることは難しいが、「プロジェクト」らしくない個々人の関係の集積によって成り立つ部分も多分にあると考えている。

映像の最後のシーンに注目してほしい。「バイバーイ、またねー」。私達ゼミ生と子どもたちが「また」いつでも会える関係を築いたという点だけは、明確に伝えたかったのだ。

３班　吉村麻友子

「わからない」ということ

報告書といって反省文になるのは避けたいが、どうしてもこれだけは、というのが一つだけある。正直形ばかりの実践になる気はなんとなくしていたし、そういった現実がつきつけられた時もさして驚きはしなかったのだが、初めて私が憤ったのが、この「わからない」という言葉だった。

企画が長引き、進行も思うようにいかない、このような状況下でもやり通さなければならない、残された時間がない。そんな中で、私たちがハマってしまったのは、よくありがちな、手段の目的化だった。

目的がすり替わった段階で、この企画はアカデミックな意味を失う。１、２班のメンバーは人間単位で得るものや気付きは多かったかもしれないが、実践として私たちゼミ生のアカデミックな（暴力的と知りつつ、便宜上、この言葉を使う）場にそれらが還元される機会を、私たちは逃し続けてきたし、そこから得られるものがいかに尊いとはいえ、それは求めているものではなかった。

生身の人間を前にして、よくもそんな机上の空論じみた野心を突きつけられるものだ、優しいゼミ生からはそんな批判が聞こえてきそうだが、人対人のミクロな実践という草の根だって効率的に張り巡らせる方法を模索したほうが良いにきまっている、と私は考えてしまう。そのための企画では無かったか。おとなりの「外国人」と仲良く話すだけなら、なにもゼミでやる必要はカケラも無い。

ゆえに、私は企画が意味を失いかけて、「わからない」という声が持ち上がってきたとき、初めて腹を立てた。企画が成功したか、失敗したか、そういった尺度でものを判断することで「失敗」の傷がつくことを嫌がったメンバーもいたが、私はそんなことよりも、小さな実践をアウトプットしていくことでモデルケースとして活用され、同様の現象が外部に波及していくという将来性・生産性・成長性が失われることがなにより恐ろしかった。草が根を張ることもせず、その場で勝手に生えて、勝手に枯れていく。私はそんなことのために一年間を費やす気は毛頭無い。

何が問題で、どうしていきたいのか。突き詰めていけばいくほど、私たちの実践の一歩の小ささは実感せざるを得ないし、私は結論を急ぎすぎていると言えばそうなのかもしれない。しかし目的意識や問題意識というのを常に追いかけないことには、共同で活動する個別の私たち集団は、そこで得た多くの経験や言葉から得た、たいせつな気付きの数々を、どんどん取りこぼしていく。
プロジェクトが本格始動した後期、実はとある教授から核心にせまる言葉をいただいた。「夢追うものは、夢をも掴む」。追えばすぐに叶う程生易しいものではないが、どこへともなく走り回るよりは、常に辿りつきたい少し先の私たちの在り方を見据えていたいものだ。

【コラム】　＜普段の三客班ＭＴＧの様子＞　木村友紀

私たち三客班のミーティングは編集構想の段階から原則的に週２回２～３時間ほど行われた。それに加えて、上映会間際にはさらに頻繁に集合して話し合いを重ねた。また、編集作業が本格化すると、中心となった生徒は毎日一日中編集作業に費やすこともあった。

ミーティングではいつもメンバーが積極的に出席し、話し合いは全員の意見を交えて行うことができたように思う。それが私たち三客班の長所であっただろう。しかし、私たちは今回の映像編集を理論的に考えすぎて、頭でっかちな議論ばかり繰り返してしまった事は反省点に挙げられるかもしれない。しかし編集作業においても編集構成においても、決して妥協せず、作業を進めることができた。そのため、今私たちが出せる力を尽くした懇親の作品が出来たのではないだろうか。

上映会であえて司会者を作らずにトークセッションを行ったのは、参加者とゼミ生の隔たりをなくす狙いだった。狙い通り、当日は活発な意見交換ができる雰囲気になり、ゼミ生も学ぶ姿勢を忘れず、全員が主体的に上映会に参加することができたと感じている。私たちらしい上映会になった。この経験を活かし、次につなげていきたい。

Ⅳ. 指導教員よりひとこと

2008 年 10 月に慶應義塾大学に着任し、初めて研究会を開講して以来、熱心な学生たちと学び教えあう楽しさを実感するとともに、彼・彼女たちの人生に少しでも貢献する教育をしなければならないと肝に銘じてきました。そんな私自身の大学教員としての試行錯誤の過程は、本ゼミが開始した実践「FRIENDS プロジェクト」に参加した学生たちの模索の道のりと重なっています。

私が自分の教育実践の一環としてこの活動をはじめたのは、大学生が授業で学んだ知識を生かして学外で実践を行い、そこから得た様々な経験を徹底的に省察することでより深い学びを得てもらいたいからでした。私自身の研究課題でもある多文化主義／多文化共生を大きなテーマとして、まずは日本の多民族・多文化社会化の現状についての知識を得ることを目指しました。文献の精読はもちろん、ゲスト講師の招聘や外国人住民支援組織関係者へのインタビュー、そして川崎市ふれあい館や鶴見総合高校の協力を得て実施したボランティア活動をつうじたフィールドワークなどを、2008 年度後半から 2009 年度前半にかけて実施しました。そうして得た知識をもとに、自分たちは何のためにどのような実践を行うべきかを皆で考えたわけですが、フィールドワークが進むにつれ、学生たちが当初描いていた構想は良い意味でも悪い意味でも崩され、暗中模索の状態に突入していきました。日頃「目標」に向かって努力することに慣れている学生たちには不安と動揺があったようです。しかし、ひとりひとりの学生のなかに確かな思考の深まりと視野の広がりをみていた私は、実はあまり心配していませんでした。

果たして、2009 年度後半になると学生たちの実践は一気に進展し、学生たちの思考にも深まりが見られるようになりました。この報告書に掲載されている学生たちの文章を読んでいただければ、そこに共通した問題意識の芽生えと気づきがあることがわかるでしょう。この不安定な世界のなかで人が「主体的に」生きていくというのはどういうことなのかということを、自己と他者との対等な対話と実践から省察していく。それが「結果的に」今年度の FRIIENDS プロジェクトのテーマになったと思います。

最終的に、学生たちは私が予想したアウトプットも期待した思考の深まりをも、はるかに超えたところまで到達してくれました。したがって大学教育の実践としては、FRIENDS プロジェクトは大きな成果をあげました。しかし同時に、他者との対話と共生を目指す際、大学教育という「守られた場所」にとどまり続けることの限界に、学生はすでに気づいています。そこから踏み出すことのない限り、自分たちの実践は自己満足だと言われても仕方がないという思いを、多くの学生たちは抱いてくれています。この１年間で深められ、広がった学生たちの意識と視野を、「守られた場所」の外でさらに発展させ、具体的に何かを動かしていくこと、そこから学生たちがさらなる学びを得ることが、来年度の目標になるでしょう。もっとも「守られた場所」から出ることが一番難しいのが、ほかならぬ私自身であることも自覚しています。

学生たちの実践は、多くの方々のご協力なしには到底遂行できませんでした。インタビューにご協力いただいたみなさま、フィールドワークや実践の場を提供していただいた原千代子さんをはじめとする川崎市ふれあい館の皆様と鶴見総合高校の笹尾裕一先生、学生の映像制作のご指導をいただいた永野絵理世さんや宮ヶ迫ナンシー理沙さん、ワークショップのご指導をいただいた木下理仁さん、そのほか本プロジェクトにご協力いただいたすべてのみなさまに、改めて深く御礼申し上げます。来年度も学生たちの挑戦は続き、みなさまのご厚意に報いるだけの内実を備えた実践へと発展していくように指導教員として努力することを、お約束申し上げたいと思います。

2010 年２月

慶應義塾大学法学部
准教授　塩原良和

Ⅴ．子どもたちからの感想

子どもたちは未成年のこともあり、名前を伏せさせていただいています。

質問内容（英語 Ver.も作りました）

1．このアンケート回答を FRIENDSプロジェクトの報告書に記載させていただいてもよろしいですか。
2．映像を見て感じたこと、映像に対するご意見をご自由にお書きください。
3．映像の中で好きなシーンを教えてください。
4．このプロジェクトに参加してくださった方（映像に出演されていた方）にお聞きします。
　４－１．参加した感想を自由にお書きください。
　４－２．来年度プロジェクトを続行するとしたら、やってみたいことはありますか。

②自分のシーンを見てはずかしいと思いました。僕のえいぞうだけあかくなっていました。
③ほとんどのシーンが好きです。
④はかなくせつないだと思いました。
④２　あります。ブラジルについて話しします。
⑥とくにないです。

②すごく楽しかったです。映像の作り方が上手です。皆のダンスや自分たちの国とか夢とか…とても感謝します。
③全部です。だって一生懸命やってたのをすごく見えます（ハート）
④映像の映り方とか並べ方が上手です。
④２ MUSICAL DRAMA PROJECTです。
⑥　皆さんへ　ふれあい館に来てくれて本当にありがとうございます。FRIENDS PROJECT の皆さんは、ふれあい館に来てもっと楽しくなってきました。残念なのは、みじかい時間だけで、とてもかなしいです。いつかまた会いましょうねい（ハート）

②すごいなぁ～と思いました。
③ぜんぶです。
④たのしかったです。
④２ダンスやってみたいです。

②はずかしかったよ。
③おれだよ。

【原千代子】
②中高生と友達になって、いっしょにビデオ制作をして下さり、ありがとうございました。お互いの貴重な出会い、経験ですね。
③高校生と大学生が活々とダンスをおどっている場面、中学生が自分を振り返り、語ろうとしている表情、場面。
⑥今日、今回参加しなかった中１～中２、受験生たちが、きっと自分も参加したいと思ったでしょう。来年もよろしくお願いします。

ふれあい館上映会後、参加した子どもたちからゼミ生にたくさんの温かいメールが届きました。プライバシーの都合上、非公開となりますが、今もゼミ生と子どもたちは、メールや電話を通じて日々繋がっています。

Ⅵ　上映会報告

2009 年 12 月 17 日　19 時～21 時　@ふれあい館

ふれあい館上映会では、ゼミ生が編集した映像を初めて子どもたちに向けて上映しました。上映会には、ふれあい館のスタッフの方々、子どもたちの友達、そして、春学期にインタビューでお世話になった方々もお招きし、アットホームな雰囲気の中、いつもの学習サポートの時間に映像を上映しました。ふれあい館の方々、参加者の皆様、本当にありがとうございました。

【上映内容全 4 本】

１班が制作した『ミュージッククリップ』・『映画予告風クリップ』
２班が制作した『自分マップ作りドキュメンタリー』
３班が制作した『参加者への感謝映像』（ゼミ生から子どもたちへのメッセージ）

自分ＭＡＰづくりドキュメンタリー放映後には、ゼミ生から映像を保存したＤＶＤを参加した子どもたち全員に手渡しでプレゼントしました。

全映像放送後、ゼミ生が用意したスポンジケーキに参加者全員でクリームやお菓子でデコレートを施し、子どもたちがデザインした思い思いのケーキを皆で分け合いました。こちらの様子は、のちの上映会で上映する映像の中に収録されています。

本上映会の様子は、神奈川新聞の方に取材をしていただきました。
記事ＵＲＬ：http://news.kanaloco.jp/localnews/article/0912290024/

■アンケート結果（敬称略）■

質問内容

1．このアンケート回答を FRIENDSプロジェクトの報告書に記載させていただいてもよろしいですか。
2．映像を見て感じたこと、映像に対するご意見をご自由にお書きください。
3．映像の中で好きなシーンを教えてください。
5．プロジェクトに参加していない方にお聞きします。本プロジェクトでやってみたいことはありますか？
6．最後に一言ありましたらお願いします。（今後の FRIENDS PROJECT に対するご要望、ご意見など）イラストも OK です。

1．Can we put your answers in our report book of the FRIENDS PROJECT?
2．Please write in your impression of or any comments on our film.
3．Please tell us your favorite scene in this film
5．To people who did not participate in this project
If you were to take part in this project, is there anything you would like to do?
6．FREE SPACE! (Please write your opinions or draw illustrations for the FRIEDS PROJECT!)

Tiali Kimura Lopes

②It was nice. It's good to see college students interacting with the reality, not just assimilating that from the books. And also, show other about non-Japanese (ethnically speaking) youths reality, lives, feelings, etc.
③When the youths in the "self map" film speak about their dreams.
⑤I think that it would be good if this project still runs. Maybe a phase 2, talking (showing) more about the youths lives. I don't know how to help, but I can volunteer!
⑥Good Job! And keep going!

崔ミンギョン

②「外国にルーツを持つ」ということが前面に出ていなかった点がかえって新鮮でよかったと思う。「○○出身である以前に夢を持つ子供であることを描いた点がよかったと思う。
③10 年後の夢を語る部分。
⑤室外でできること（例えば東京めぐりとか）
⑥ファイトです！　これからも成果物を発信してください。

D J

②Very NICE
③EVERYTHING!
⑤DIRECTOR!!（笑）
⑥BABY COME BACK TO ME…

ジェサ

②very good presentation…congrats

③All of them because it is fun to watched the Movie…

倉形亮

②中学生という時期に、自らの過去を振り返り、これからを考えるというビデオに出演した子供たちには貴重な機会だったと思います。

③被写体となることに恥ずかしがっている子供たちの顔

⑥製作者の方々も楽しそうでした。

永野絵理世

②おもしろかったです。ＦＲＩＥＮＤＳプロジェクト、大成功ですね！高校生×大学生ならではの、そして、今、この時期だからこその貴重な映像ができあがったと思います。

③自分マップチームの映像で、高校生が夢を話すシーンなど

その他メモ

ダンス　―ダンスをメインにするか、ドキュメンタリー的にするか

映画　―何分？

自分マップ―キャラクター紹介をもっとわかりやすく、大学生の夢も聞きたい

制作後記　―音と口のずれあり

全体をつなげて、一本にする。ＦＲＩＥＮＤＳプロジェクトの説明やタイトル

その他、全 22 人の方からアンケートをいただきました。

ご協力ありがとうございました。

映像上映後のケーキ作りの風景。

2010 年 1 月 15 日　16 時 30 分～18 時　@日吉

ゼミ生二人が 2 年生次に受講していた「スペイン語――ラテンアメリカの政治と社会（担当渡辺暁先生)」の今年度授業で、主に政治学科の 2 年生に向けて上映させていただきました。渡辺先生の授業ではラテンアメリカ各国の国内政治だけでなく、アメリカ合衆国のラテン系住民や日本に住むラテンアメリカ出身者を取り巻く状況についても扱われていることもあって、そのテーマに即した活動をしていた私たちを授業にお招きくださいました。10 月にはゼミ生の蜂屋が、日本におけるニューカマーに関する問題、特にニューカマーの子どもたちの教育の問題について普段のゼミの活動を交えてお話をさせていただいており、上映会当日は 2008 年度に渡辺先生の授業を受講した畑と蜂屋が出向いて上映させていただきました。授業ご担当の渡辺暁先生、授業を受講して下さった方々、ありがとうございました。

【上映内容】
ふれあい館で上映した『ミュージッククリップ』・『映画予告風クリップ』
『自分マップ作りドキュメンタリー』を含むＦＰ全体映像
（全 70 分）

70 分の全体映像初の上映会となりました。

本上映会では、マシーントラブルが相成り、上映前後にきちんとしたプロジェクト説明・映像に対するディスカッションの時間を設けることが出来ず、不十分な伝え方となってしまったことがゼミ生の中で大きな反省点となりました。強いメッセージ性を持たない本映像をオーディエンスに丸投げしてしまったことで、外国につながる子どもたちについて考えるきっかけ、映像を通して彼ら/彼女らと対話をするきっかけを作ることができず、それが次回の上映会の大きな課題となりました。

2010 年 1 月 18 日　17 時～22 時　@三田の家

慶應義塾大学三田キャンパス近隣の施設「三田の家」にて、一般公開型の上映会を行いました。

上映会にはカナダやアメリカからの留学生の方々、在日中国人の方など、様々な文化的バックグラウンドを持つ方々が来て下さり、これまでの上映会とはまた違った視点から本映像を捉えた有意義なディスカッションを行うことができました。ディスカッションの中では、映像による伝え方という技術的な面、外国に繋がる子どもたちをどう捉えるのかという解釈の面などが議題に上がり、アイデンティティーの問題から帰国子女についても同類の映像を撮り、時間軸を並行させた形で２つの立場を合わせた映像を製作してみるのはどうかなど、新たなプロジェクトの形の提案も行われました。

また、三田の家という「場所」との出会いにも恵まれ、来年度もＦＰの活動場所のひとつとして三田の家で活動していくことが出来ることとなりました。

三田の家のスタッフの方々、上映会に来てくださった方々、ありがとうございました。

【上映内容】ＦＰ全体映像 70 分映像

スケジュール	
17 時	開場
	三田の家スタッフ、塩原先生、ゼミ生で夕飯づくり。
18 時	集まった皆様と談笑しながら夕飯（ちらしずし、風呂吹き大根、お味噌汁）
19 時	簡単なＦＰの説明→上映会
20 時半	ディスカッション（英語・日本語）
22 時	片づけ、閉場

■アンケート結果（敬称略）■

質問内容

1．このアンケート回答を FRIENDSプロジェクトの報告書に記載させていただいてもよろしいですか。
2．映像を見て感じたこと、映像に対するご意見をご自由にお書きください。
3．映像の中で好きなシーンを教えてください。
4．最後に一言ありましたらお願いします。（今後の FRIENDS PROJECT に対するご要望、ご意見など）イラストも OK です。

Lori Forman

2 The documentary section was very helpful to understand the films, but it was good to see the movies first and then the documentary. Subtitles(English/Korean/etc depending upon the audience) would be helpful.

3 The use of the camera and credits/captions and editing in the map/drawing video was very powerful. I think Kenny has a future in filmmaking.

4. This is a discussion and learning that will need to continue and grow because Japan faces the increase of foreign labor (and their families) into Japan. It would be interesting to do a comparative documentary of returnees in Japan, asking about their experiences overseas and how they felt being taken away from their friends by their parents' jobs and how they dealt with that.

角田善彦

2　映像の創りの印象であまり「プロフェッショナル、プロフェッショナル」していないところがよいと思います。如何に素人が映像を媒体として使うか、そのことの意味を今後も大切にしていただきたいなと個人的には思いました。

3　自分マップを描いている時の皆の（明るい）表情。Making 映像の最後のふれあい館でのお別れのシーン。湿っぽくなくて次に繋がるようで良かった。

4　プロジェクト名が一回きりに終わりそうな感じでいやだという振り返りがあったかと思いますが、確かに名前によって（特に時間が経ったりすると）縛られるケースもあるので名前は重要だと思います。

高松佑介

2　見る人にとって、たぶん興味を持つ場所が違うと思うので、その意味で面白い映像でした。

3　「ロジックで語れない部分」というのと、ゼミでのディスカッションの音声のうしろで女の子が笑っている映像が映っている場面が心に残っています。

4　合理主義や「ムダ」を省くという風潮の中で、このようなことに取り組むのは意義深いと思いました。ディスカッションも僕にとって刺激的でした。ありがとうございました。

渡辺久美

2　映像上映後に大川さんのしてくれた解説を聞いてからの方が見やすかったと感じました。なぜなら何が言いたいんだろう？　と想像しながら見るには、少し冗長で、集中力が続かなかったからです。着地点がわからなくて不安になるのは私の悪いところなのですが。学生たちの姿勢にすごく共感しました。「期間限定の友達への違和感」とか「ディレクターは置かない」とか。いろいろ。すごい体験（体験というのは適切じゃないですね）をされていると思います。大切にしてほしい。「違う日本」みたいな意味の言葉がビデオの中で出てきて、私も最近、大阪の「あいりん」地区に行ったことを思い出しました。違う日本じゃなくて、知らなかった日本なんですよね。一本目の映像のダンスシーンはやっぱりちょっと長いんじゃないでしょうか。高校生たちがはにかみながら、楽しそうに踊っていたのは可愛かったですケドね！

3　ゼミ生一人一人がそれぞれ感じたことを話してくれるのが面白かったです。自分の苦手なダンスになぞらえて、子どもたちの気持ちに寄り添っている話とか、みなさん一人一人の感想、想いが伝わってきました。「幸せな生活をつかみとりたい」っていう言葉が印象的。見方によってはたしかに彼は、恵まれていないかもしれないけど、彼は笑顔でしたね。

4　学生時代に取り組むことは、本当に期間限定になりがちです。それでも、やらないよりやってみてほしいと思うのですが、今後、どのようにお付き合いをつづけていくのか、あるいは続けていかないのか、そのへんの考え方も盛り込まれているといいなぁと思いました。

その他、全６人の方からアンケートをいただきました。
ご協力、ありがとうございました。

2010 年 2 月 3 日　17 時～20 時　＠日吉キャンパス来往舎

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎大会議室にて、最大規模の上映会を、ゲストスピーカーをお招きしたトークセッションを加えた「ワークショップ」という形で実施しました。それまでの上映会を経て、ＦＰの映像はオーディエンスの方々に映像によって考えていただくこと、そのあとに意見交換をし、その考えを深めていくこと、そのプロセスが重要であると感じた私たちは、2009 年度ＦＰ最大規模の上映会となった本上映会ではその意見交換に重きをおいたプログラムを企画しました。

日吉キャンパスに通う慶應義塾大学政治学科 2 年生を筆頭に、他学部の学生の方々、先生方、多くの方々に来ていただき、上映後も開場の様々な場所から声が飛ぶ活発なディスカッションを実施することが出来ました。経済学や芸術からの視点など、会場にいらしてくださった方々が持っていらっしゃる専門からの視点から映像に対するご指摘をいただき、国際社会学、ひいては学問の枠に留まらないＦＰの可能性と広がりを感じさせていただくことのできた上映会となりました。

中でも、ＦＰ映像を宝石の「原石」と表してくださった参加者の方に多くのオーディエンスの方々、ゼミ生が共感し、会場が一体となりました。世間では加工されたダイヤモンドのような宝石が価値を持つが、ＦＰの映像は加工前の原石のままであり、オーディエンスによってそれが全く違う輝きを見せる価値に変わる。世間で価値を持つものがダイヤモンドであることには変わりないが、ＦＰ映像は単なる既存のドキュメンタリーに終わらない新たな価値の可能性を持つ映像であるとして評価をいただきました。

上映会にいらしてくださった方々、本当にありがとうございました。

【上映内容】ＦＰ全体映像 70 分映像

スケジュール	
17 時	開場
17 時 15 分	ゼミ生挨拶 塩原先生よりご挨拶 映像上映
18 時 45 分	ゲスト、ゼミ生によるトークセッション
19 時 10 分	会場より質疑受付→応答→ディスカッション
20 時	閉場

■ゲストスピーカー■

宮ヶ迫ナンシー理沙（みやがさこなんしーりさ）
日系ブラジル人２世。
９歳のときに来日。
08 年、外国生まれで日本育ちの仲間たちによるライフヒストリードキュメンタリー、
「Roots of Many Colors」を制作。

永野絵里世（ながのえりせ）
日本映画学校卒業後、フリーでドキュメンタリー映画制作などに携わる。
［主な作品］
02 年「ヘンニムの輝き」制作
08 年「Roots of Many Colors」プロデューサー

２月３日の上映会には、春学期にＦＰについてアドバイスをくださったナンシーさん、９月より２回に渡り、ゼミ生に映像講習会を開いてくださった絵理世さんにおいでいただき、ＦＰ映像上映後にお二方から感想と、ご自身の経験についてお話していただきました。

お二人は、ふれあい館のある桜本地域と普段から交流も深く、「Roots of Many Colors」という外国につながる方々のドキュメンタリー映画を製作なさった経験をお持ちです。本トークセッションでは、司会役のゼミ生からの問いかけに丁寧にお答えくださり、ＦＰ映像に収められた情報をさらに深めた知見をシェアしてくださいました。

■アンケート結果（敬称略）■

質問内容

1．このアンケート回答を FRIENDSプロジェクトの報告書に記載させていただいてもよろしいですか。
2．映像を見て感じたこと、映像に対するご意見をご自由にお書きください。
3．映像の中で好きなシーンを教えてください。
4．最後に一言ありましたらお願いします。（今後の FRIENDS PROJECT に対するご要望、ご意見など）イラストも OK です。

森香梨子

2　日本に住んでいる外国人という視点が私の中に無かったので、そのような人たちがいるのだなぁと新鮮でした。ゼミ生のみなさんがすごく楽しそうだったことと、プロジェクトの意義などを真剣に話し合っていたことが印象的でした。
3　最後のふれあい館で好きな人の話をしているシーン。仲のよい部分がすごく分かるので。
4　様々なバックグラウンドを持つ人々が共存していくには、まずお互いの違いを認識する必要も、やっぱりあると思います。その違いを正しく認識した上で、じゃあどのラインでお互い気持ちよく暮らしていけるのか、その線をお互いに模索していくことが大切なのだと、私は思ったりします。だから、ゼミ生のみなさんが「大学生」と「在日」という二極を意識してしまい悩んでいた時期があったのも自然なことだと思うし、その後、どうしていくのかが大切なのかなぁと思いました。

柏崎千佳子

2　ゼミのプロジェクトらしく、「ふつう」の作品とは違う作り方になっているところがおもしろく、また良かったと思います。ゼミ生のみなさんがプロジェクト/実践について振り返り、考えるプロセスをよく伝えていると思いました。
3　高校生が生き生きとダンスする姿
4　たくさんの「問題」を発見できたのが収穫だったのではないかと思います。「答え」を簡単に出そうとせずに、考え続け、またさまざまな実践（ゼミに限らず）を重ねていってください。

沼尻和樹

2　編集をすると、どうしても主観が入ってしまいがちですが、今回の映像はとてもそのままの状態を見ることができたと思いました。日本にいる外国国籍の子どもたちの存在は、全く知らないわけではなかったけれど、実際に映像を見てみて、よりリアルにそのような存在がいることを感じる半面、日本の子どもたちとほとんど変わらないなと思いました。このような子どもたちに対して特別視すべきところと、特別視してはいけないところの境界線は難しいなと感じました。←これについてＦＲＩＥＮＤＳプロジェクトが終わってみて、どう感じるようになったのかをもっと知りたいです。
3　ダンスや自分マップを作っているシーンも良かったですが、何もなくたわいなく触れ合っているシーンが印象的でした。年齢も国籍も違う人たちと、こんなに仲良くなれるものだと思い、やはり同じ人間なのだなと感じました。
4　映像について改めて考えさせられました。

草野昂志郎

2　今回の映像を見て、答えというよりは何か自分たち日本人に課せられた課題というものが見つかった気がしました。というよりはむしろ、これから何をすべきかを考えるという課題というかそういったものに自分もこれから積極的に取り組んで異文化との共生の在り方を探っていきたいと思います。

3　Ｊさんがダンスをする時となると、それまでと一変してとても熱意を持って取り組む様子が印象的でした。このシーンから、私たちが交流を行う上で何を与え、何を一緒に行うかの選択の難しさを感じました、「一方的」という状況を避けないことには真の「共生」が達成されないという難しさは乗り越えるべき大きな課題のひとつだと思います。

4　ＦＲＩＥＮＤＳ　ＰＲＯＪＥＣＴは共生の在り方などを考える上で、非常に素晴らしい取り組みだったと思います。なので、この一回限りで終わってしまわず、これからも何らかの形でこういった活動を継続していくことが大事だと思います。ひいては、ここで学んだこと、感じたことを活かして「日常の実践」を各人が行うために何が必要なのかを考え、そこで得た理論・理想といったものを具体的な形で社会に還元していくことが必要だと思います。

松尾幸明

2　なぜこのプロジェクトが必要なのか、何のためなのか、何がしたいのか、最終目標は何かなど、大前提となることが映像のなかでは明示されていないのではないだろうか。学生たちがそのことに苦悩し、結論を出そうとしているのが伝わってきたのは良かったが、そもそも一体何を問題としているのかがわからない。それによって見ているこちらも考えさせられ、非常に有意義な内容だったと思う。ケーキの出てくるシーンや道をまっすぐ歩くシーンなど、グラグラとゆれて気持ちが悪くなった。あまり必要ないと思う。

3　ふれあい館の子たちとゼミ生がなかよく話しているシーン
「フレンズ」というタイトルなので、実際にふれあってなかよくなっていくのは見ていて安心した。初対面のあまりなかよくないときのシーンも入れて、なかよくなる過程を見れるとなおよかったと思う。

4　もっとゼミ生はあまり考えず、軽い考えを持っているのではないかと思っていたが、ゼミ生全員が深く考え、何か結論を出そうとしている姿勢は素晴らしかった。

君島隆一

2　何が「よい」のか何が「悪い」のかということを明らかにしないところが新鮮でした。

3　制服ダンス、いや、正直に……。

4　もう少し、見た人を動かす、立ち上がらせる何か、よい意味でも悪い意味でも一撃があればよかったと思いました。しかし、今日のような機会を作っていただいたのは嬉しかったです。ただのディスカッションだったら来なかったと思います。彼ら子どもたちについて考えることはなかったと思います。

田中雄一朗

2　一生懸命作成したムービーであることがよくわかりました。在日外国人（new comer）の中学生（高校生）と塩原ゼミの学生が真のふれあいを模索していく姿に感銘を受けました。

3　ダンスシーン　自分マップ

4　私は経済学部の杉浦章介研究会に所属しています。研究分野は経済地理です。実は去年、このゼミの入ゼミ課題を作成するにあたってふれあい館に大変お世話になりました。個人的には在日コリアン（コリアンタウン）に興味があり、彼らがどのようなアイデンティティーを模索しながら日本で生活しているのか日々考えています。FRIENDS PROJECT では new comer の外国人とのふれあいを重視していましたが、old comer とのふれあいについても扱っていってほしいです。

Shigeko Mato

(I learned about this presentation from prof. Takenoshita at shizuoka Univ.)

2　The film was not about the children (junior high, high school students) from other countries, but rather about the roles, responsibitilities and limits of intellectureals' knowledge's　I was impressed with the enthusiasm among the seminar students toward their involvement in the activities with the foreign subjects

3　The discussions with the progessor. They show the foundamental quetiore of possibility or impossibility of representing "Others"

4　With their audiences of the distance between them and the subjects that they try to represent thought though film.

I love the whole thing – film + dialog afterwards! Thank you!

匿名

2　多文化共生というテーマで多くの国々と関係のある若者が日本で生活していて、普通の日本人という方にははまらないことで悩むことがあるということを理解できました。ひとつ感じたことは、とても内輪な面が多く、このプロジェクトにはあったのではないかと思いました。多文化とは共生するということが難しいというのが問題の底にあると思いますが、このプロジェクトに参加していた高校生は海外と関係があるという共通点がある集団で、大学生はゼミで学び理解しているある意味、高校生との同一の集団で、そういった意味ではとても内輪な映像だったのではないかと思いました。多文化共生の難しさも、映像から見たかったです。

3　ゼミ生の方も説明されていましたが、高校生と大学生の間にはいろいろな壁があったと思いますが、その堺はなくなって、大学生にため語で話していたシーン。彼らを変えたみなさんは何か彼にとって重要なことをしたと思います。実際に社会の中でアクションを起こし、人が変わることは素晴らしいと感じました。

4　プロジェクトが終わっても、とてもよい関係が続いていると聞いたので、このようなことの積み重ねが、社会の構造を変えるきっかけになるのではないかなと思いました。こういったプロジェクトが継続するとよいなと思います。新たな刺激を受けることができました。ありがとうございました。

匿名

2　「ワークショップ」という名にふさわしい内容だったと思います。
言語を越えてものを表現しようとするスタンスに共感します。ただ、言語以上のものを伝えようとするにはカメラ（観客）と被写体の距離が遠かったかなと思いました。客観的な位置で見ていました。なので彼ら（子どもたち）の言語以上のものが伝わりづらかったです。

3　ダンスのシーン

4　勉強になりました。すばらしい作品です。ここから社会に向けて何か発信してくれることを楽しみにしています。ありがとうございました。

匿名

2　映像自体は単なるドキュメンタリーでしたが、映像という媒体を通して深遠なテーマにはいってゆこうという制作者の意気込みが伝わってきました。

3　全体的に好きです。ダンスのシーンは、皆で恥ずかしがりながらも楽しそうに踊っていたし、制作者へのインタビューではゼミ生の葛藤が伝わってきたし。異なる人種、エスニシティーに属する子どもたちが分け隔てなくじゃれあう姿、これは多くの人が夢見ていながら、一度もたどり着いたことのない地平なのかもしれませんね。

4　何故「多文化共生」を目指すのか？　というのが最近、よく考えるテーマです。どうして「多文化分離」型の社会ではいけないのか、異なる民族グループに属する人々がそれぞれの文化を保持しながら異なる道を歩む……これはこれで「幸せ」な世界だと思ったりもします。ただ、多文化分離型の社会を実現するには、地球は狭すぎますよね。考えるキッカケを与えていただき、感謝しています。

匿名

2　映像は文章や写真では伝わらない一瞬一瞬の出来事や様子を伝えることができるものだなと思いました。
４つめの作品の中でゼミ生が映像を作成する過程でいろいろ悩んでいたことを知り、完成した作品につかわれている映像や文字は各々意味があるのだと感じました。

3　ふれあい館の子どもたちが好きなこと（ダンスなど）をするときに見せる笑顔やゼミ生にいろいろと質問されて自分のことを語る子どもたちの表情が印象的でした。そして、この時に見せる生き生きとした表情から、ふれあい館の子ども達自身、自分たちに興味を持ってくれる存在がいることが嬉しいのかなと思いました。

4　今回ドキュメンタリーという形で日本に住む外国人の子どもたちがいること、彼らがどんなふうに日本で過ごしているのかということを知るきっかけになってよかったです。ただ客観的に彼らのことを考えるだけじゃなく、一緒に何かをするということに価値があるのかなと思いました。

匿名

2　最初は FRIEND PROJECT と聞いて、すごい期間限定で作為的なものを感じてしまい、一体どういうものなのか、多文化共生にどのようにつながるのかなと思っていました（すみません。）ただ、大学生として研究をする以上、社会につながる・貢献しなければという事情や気持ちもあるだろうし、そういった意味で二項対立は超えることは難しいのかなと思いましたし、無理に超える必要もなく、お互いに何が難しいのかきっかけを与えることができたら、とてもよいのではないかと思います。

3　自分マップで、ゼミ生の人が自分のことを話しているシーンが好きです。子どもたちと同じ目線で話している感じがしたので。

4　今日映像を見れたことで、多文化共生について勉強したり、考えたいなと思いました。そういうきっかけを与えてくださってありがとうございました。

その他、全 29 人の方からアンケートをいただきました。
ご協力、ありがとうございました。

■今後の FRIENDS PROJECT について■

こうして FRIENDS PROJECT2009 は、2009 年度でひとまずの振り返りの時期を迎えましたが、2010 年度は塩原ゼミに新たな学生、３期生を迎え、2009 年度の活動の反省を活かした上で新たな FRIENDS PROJECT の形成と発展を目指して参りたいと考えております。

それにあたり、2010 年 3 月のゼミ合宿では、他大学の学生との意見交換の場を持ちながら、2010 年度 FRIENDS PROJECT の展望についてゼミ生一同、時間をかけて話し合っていく予定です。

Ⅶ．編集後記

本報告書は、FRIENDS PROJECT2009 参加者である塩原ゼミのゼミ生、そして塩原先生が、プロジェクト一段落後の 2010 年 1 月に FRIENDS PROJECT について寄せた感想をまとめたものです。それ付随し、編集者作成による FRIENDS PROJECT2009 の軌跡、各上映会報告、アンケート結果を掲載しております。これらの活動記録によって、各ゼミ生の感想・反省の根底を少しでもお伝えすることが出来れば嬉しく存じます。

今回は未成年ということもあり、ふれあい館の子どもたちからの感想は極力掲載しない形となってしまいましたが、この 1 年強、子どもたちをはじめ、ふれあい館の皆様からいただいたコメントは FRIENDS PROJECT を大きく動かし、ふれあい館の皆様なしではこのプロジェクトはここまで形になりませんでした。本当にありがとうございます。

そして、FRIENDS PROJECT 進行にあたりインタビュー、講習にご協力いただいた皆様、改めてご協力、本当にありがとうございました。今年度は、FRIENDS PROJECT 初年度ということで、多くの困惑に遭遇致しましたが、今年度の経験を活かし、新たな発見を模索しながら、FRIENDS PROJECT をこれからも継続して参りたいと存じます。

また、FRIENDS PROJECT の上映会にお越しいただき、アンケートにご協力くださった方々、ありがとうございました。皆様からの回答により貴重なフィードバックを得られたこと、ゼミ生一同強い感謝の念を覚えると共に、皆様の丁寧なご回答にとても感激いたしました。皆様の回答も FRIENDS PROJECT の大きな要素であると存じ、今回、報告書に記載してよいというお答えをいただいた方の回答を全て記載させていただきました。

これらの感謝を力に変えて、これからも精進してまいりたいと思います。
本報告書をご覧くださり、本当にありがとうございました。

2010 年 2 月　編集担当　蜂屋絵美里

平成 22 年 3 月 1 日発行

編者　塩原良和研究会　蜂屋絵美里
発行者　塩原良和研究会
発行所　慶應義塾大学　塩原良和研究会

本報告書についてのお問い合わせは、下記連絡先までよろしくお願いいたします。
shiobara_seminar@yahoo.co.jp